

つた。

此の計畫の實施の細則は、一に商務院の命令に委任したのであつたが、それによるとブルガリア、オーストリア、ハンガリーが輸出先に加へられ、英帝國のうち英領印度、錫蘭、及び其他極東の英國領には適用しないことにした。何故英領印度其他を除外したかと云ふに、それは之等の地方はマシエスター邊の棉製品が澤山到着してゐるが、植民地の商人は、値下りの爲めに引取りを拒んでゐる英國品は此地方に山積してゐるから横合から、輸出貸付にて強ひて新に賣り込むべきでない、マシエスター邊の商人の建言によつたものと言はれてゐる。

保證には二種類あつた、第一は輸出商に對する保證で、それは英國政府が送狀の價格の最高八十五%迄保證し、損失を被つた場合には、政府は其の損失の半額を輸出商に請求し得る、損失を計算するには、輸入業者の支拂つた金額及び差入れた擔保の價格を引き去るのである。

例へば貨物の送狀面の價格が假に千磅だとし、政府が最高八十五%即ち八百五十磅保證したとし、そして輸入商が四百磅の時價の擔保を差入れた上に、尙ほ二百五十磅支拂つたとすれば、損失は二百磅となる、其の半額百磅は政府は輸出商に請求し得る。

第二の保證は銀行に對する保證で、其の取引が銀行によつて保證された場合には、其銀行の貸付額に對して七〇%に至るまで保證する。

此の如く輸出信用計畫は更に彈力あるものとして改正され、輸入高の割合も輕減されたのであるが、文字で書いた上だけは巧妙であつたけれども、實際の結果は一向つまらぬものに終つた、即ち二千六百萬磅貸付ける豫算の處を僅か三百萬磅しか借手がなく、此の計畫によつて英國の輸出が振興された形跡はないのであつた。

かうした失敗に終つた原因として英國の經濟雜誌などに指摘されてゐる所を上げて見れば、

第一、にそれが役人の仕事だからであつた。

それは或貸付をなさんとするには、政府は第一に外國の輸入商の信用を調査せねばならぬ、こんな事は多年かうした事務を採つてゐる海外銀行とか、貿易商などならば、たいした手數でもなからう、が無經驗な杓子定規の役人輩ではそれが出来ない。いつまでも彼是と手間どつて了ふ、かうした事には正確と共に迅速を要するのであるが、役人風情では正確は或は期し得べきも、迅速を期することが出来ない、ために貸付の申請をしてゐる間に、どん／＼商機を逸して了ふことになり、商人

もあまり貸付を願はず、在つたとしても政府は國家に損を掛ける恐れがあるから、むやみの事も出来ない、要するに大名か汁粉屋を開いて、小豆が一升に鹽が八合のお汁粉を御客に横柄に賣りつけたやうの事で、英國の輸出貸付も、鹽がきゝすぎた憾があつた。

第二の失敗の理由は需要地の購賣力の減退である。

これは寧ろ根本的の理由で、買へと言つたつて、どうすることも出来ぬ、貸付金位で救済する事が出来なかつたのである。そこで此の缺陷を救済する爲めにターミニューレンの案なるものが、有るがそれも未だ埒があかず且つ又あまり岐路に入る恐があるから、此處には述べない。

以上の如き缺點を改正して、どうかして折角の計畫の効果を發揮しやうと云ふのが、首相の遺般の提案である。

彼は言ふ「従前は取引の度毎に、輸出貸付局から承認を求めねばならなかつた、が紡績商達はこんな方法では商賣は出来ぬと云ふ、其の人達が商賣をやるには、註文取を國々に旅させる。然るに註文を取つてから、取引を定める前に、國へ電報を打つて、輸出貸付局へ細い事迄申告し、其の承認を得てからと云ふのでは、商賣はとても出来ないと云ふ、で今度は該輸出商に對し、初めから貸

付の最高限度を一定し、此の限度内で各自に適度に商賣させやうと言ふので、此の最高限を定めるには、輸出商の信用を考慮に入れて、特別審査委員か定めることにする」

第二には適用區域を英帝國全體其他の諸國とし、

第三には貸付金の期限を輸出品の品質、取引の習慣と必要とによつてそれ／＼改正すると云ふにある。

其後英國政府の白書によつて發表された所によれば、英領印度、セーロン、海峽植民地等と露國とは除外されてゐるし、細則もあるが、茲にそれを述べるのは、あまりに讀者を煩はす恐があるから止めて置く。

以上は輸出貸付計畫第二項改正の骨子であるが、之れに對する英國銀行家間の批評はあんまり有望ではない、彼等は必ずしも改正の効力はなからうと云つてゐる、そは銀行は幾度かの實驗に照して、英國の輸出業者に對し、今日以上貸付を擴張すれば必ず損失を招くと云ふことを知つてゐる、だから政府が強ひて此の計畫を實行すれば、きつと損失を招くであらうし、又損をしないとしても必ずや奢侈品を外國へ強ひて賣込む傾向を助長するに相違ないから、輸入國では其の結果奢侈品

の購入に餘計の借金をして却て眞實の意味に於ける、戦後の經濟復興を妨げるだらうと言はれてゐる。以上は主として謂はゆるシテ一の批評であるが、未だ實施された結果を見ないのであるから果たしてどんなものか解らぬ。

此處に私が一言注意して置きたいことは、日本の實業家達の悪い癖として、何か少しでも自分達に都合の良い事があつたり、又少しでも危険を履まねばならぬ事があると直に政府の保護を受けやうとする傾向が強いとである。或有名の実業家が、大藏大臣に公債償還（であつたかを忘れは忘れたが）を願ひに出かけて、大臣が應接間へ出て來たら、いきなり椅子の上に座り込んで、もみ手をして頭をペコ／＼やつたと云ふ實話がある程、日本の實業家には役人が尊く見えるのである然かし私共國民は政府が保護に費す金の性質をよく考へて見ねばならぬ、其の金は恐く私共國民の膏血を絞つた租税であるか、さもなければ私共が辛苦して貯蓄して預けた貯金なのである。大藏省預金部の金と云ふのはこれなのである。然るに國家の利益と云ふ美名にかくれて、少數の資本家はそんな金を獨占して暴利をむさぼるのである、此點に讀者は至大の注意を拂つて頂きたい、其の金が使はれた結果、國民に及ぼす利益は極めて間接であるか、さもなければ殆んど無いのであることを記憶

したい、うそと思召すならば大藏省の預金部の金が社會政策の意味で何割位使はれるか、それと資本家の利益の爲めに使はれてる比例を質問して御覽なさい、諸君を代表して代議士をして質問させて御覽なさい。諸君は私の言葉の虚偽でない事を知るでせう。

日本の輸出貿易は振はない、英國でも輸出保護の貸付をしてる、だから日本でも國家全體の利益の爲めに政府で保護して頂きたい、てな聲は圖々しい實業家達、資本家達がぼつ／＼上げてることを諸君は注意して聞かねばならぬ。固より輸出振興は結構であるが、彼等が眞に國家の爲めに輸出を振興せねばならぬと云ふなら、戦時中の輸出旺盛期にためこんだ不當の儲けをそれが爲めに吐き出せと、私共は申さうではありませんか、のみならず英國に於ける輸出貸付はあまり成績が良くなかつた事を私共は記憶せねばなりません、然らば同一の方法か日本に翻譯されたとしても、日本に於いては特別の理由があつて、英國よりは好成绩を奏し得るてふことが證明されない限り、こんな膏藥張りに類する政府の保護を、特種階級に與へることを私共は反對しませう。そして私は寧ろ日本の實業家が封建時代の町人根性を潔くかぎり捨て、立憲國民としての自覺に基き、眞に自治的に輸出振興に努力すべきであることを警告したい。

英國首相は進んで更に一新案を提出した。其れは政府の補助によつて低利の企業資金を供給する案である。即ち政府は自治領、植民地、外國政府、公共團體、其他の團體が、起債する場合には、政府が其の元利金の支拂を保證せんとするのである。其の保證の條件は英國に於ける失業を救ふ爲めに、就職口の増加を來すが如き事業の爲めにする起債に限る。例へば鐵道、電氣事業、水道の如き、仕事を増加する企業たることを要し、之れが爲めに政府の費すべき金額は二千五百萬磅を限りとし、金融、産業等經濟に關する十分の經驗と智識ある人々を委員に擧げ、此委員會によつて遺憾なき實行を期せんとするにある。

此の提案に對する財界の批評は輸出貸付計畫の擴張ほどは不評判でなく、起債さるべき公債中殊に英國植民地の公債に對して、多少期待されてゐるらしい。其れは戰時中英國は食物の殆んど全部を外國、殊に米國から供給を仰ぎ、其れが爲め苦い經驗を嘗めたし、今日に至つても尙ほ英米爲替の暴落に苦しんでゐる、だから植民地の鐵道や運河、道路等に英國の資本が投ぜられ、従つて植民地の農業が發達すれば、英帝國內に食物の自足自給を講じ得るかも知れぬとされるからである。

・然かし政府の計畫がどの位の程度に有效であるかは、經驗家は疑つてゐる。例へば南亞政府が倫敦で起債するとして、其れに英國政府が保證して見てからが、南亞政府の受くる利益は、左程のものであるまいのに其の募集した金を是非英國で使はねばならぬとすると、英國の生産費が安くない限りに於ては却て損になるかも知れない、其外此の計畫によつて公債社債が亂發されて、無用の事業が起り、徒らに勞銀を高くしては、眞實の産業恢復にどれだけ貢獻されるか疑はしいとされる。

英國の金融市場の人は、殊に自治を悦び、政府の保護や干涉は何事にまれ排斥したがる傾向があるから、或は以上の批評は少しく酷に失するかも知れない、何れにせよ實行の後に非されば、何とも判斷が出来ぬ。

假に英國の此の計畫を日本に轉用したらどうか、日本では政府が起債の保證をすることは既に行はれて、寺内内閣當時たしか一億圓の興業銀行債券を發行して、其の金を支那へ貸付けた事があるやうに記憶するが、市場ではあまり政府の保證に重きを措かね傾向もないではないが、保證の有るは無いのよりは良いだらうと思ふ。で私は植民地開發の意味で、朝鮮の私設鐵道がすつかり合同し、

政府の保證によつて内地で社債を募集してはどうかと思ふ。朝鮮の産業調査委員會とか云ふのがいつか開かれ、其の決議も發表されたが、皆御尤も至極で誰も賛成なんだが、實行はいつから始まるのかとんと其後の消息を聞かない、眞似すきの日本政府は、此邊の所から英國の眞似をしてはどうか、が、政府が財政上の浪費をやつて、無暗に公債を募集しては企業資本の吸収を妨害する。恐らく今年は此儘で進むと随分金がつまつて事業の爲めの起債などはむづかしく成りやせぬかと私は懸念する。

紹介の順序は少しく顛倒したが、ロイド・ジョージは英國の輸出を振興せんが爲には、植民地の開發に努めねばならぬこと、又英國に於ける各種産業の生産費が高きに過ぐるから、生産費を安くせねば、註文がつひ外國にとられて了ふ事を指摘した、然かし生産費の低減に就いては、資本家及び労働者の善意の協調によつて處理すべく其點は手のつけやうがないと云つてゐる。

英國には宏大な植民地がある——彼等は實にうまくやつてゐる——が我國には植民地と云ふに足るべきものかないのは遺憾である。然かし日本の輸出貿易と滿蒙——特に私は滿蒙は支那でない——と云ふ説に賛成する——及び支那の天然源資の開發は、相關する所甚大なることを知る、それは

私が常に力説する所であるが、然らば我が政府は、特に國民中の或一部分を代表する政友會内閣は滿蒙支那に對して何をしたか、恐く朝鮮や滿蒙から政友會代議士が選出されてゐない關係から來てゐるのであるが、原内閣以來之等の地方に就いては、政府はあまり顧慮しないのであると云ふ外はあるまい。所が多數國民は、支那や滿蒙の開發に努力することが、地方の鐵道や港灣の發達に努力するよりも、遙に自分達に幸福をもたらす事を知らぬらしい、地方鐵道や港灣修築で利益を得るものは、地方の小數の地主や、大商人に過ぎないことを、今度機會があつたら、痛快に私が指摘してあげやう。それは兎に角、政友會内閣時代に於ては、植民地は或は南滿鐵道會社によつて或は關東都督府の阿片專賣を通じて、政友會員の選舉費の略奪場となつてゐるではないか、それは國民の眼前に目下展開されつゝあるが如く、植民地なるものは、彼等にそれ以上の意味がないのではないか。だから私は次代の國民に告げる、ニウ・ジエネレーションに告げる、汝等の大陸への發展に就いては、決して政府に依頼すること勿れ、急がずに、而して休まずに水がいはほに滲み込んでいく様に、支那へ日本を滲透せしめよ、その天然資源を開發せよ、それはカインの末裔の如き支那國民にも、又我國民にも幸福となるであらう。

英國首相が英國の生産費の高きに過ぐることを警醒了たことは、より以上に我國に於いて眞實であることを私共は身にしみて戒むべきである。しかし日本の勞銀は何と云つても英國よりは安いとすれば、日本の生産費の高いのは、配當が高過ぎること、重役賞與の多過ぎること、物價の高きに歸せねばならぬ。

物價の引下げは、何と云つても財政上の浪費を改めること、それには必要もなき陸軍を三分の一に減じ、撤兵し、海軍費を減すれば、豫算は少くも五六億を減じ得る、さすれば物價は最もま直に下るだらう、次には國民の浪費を戒むることである。此際東京諸新聞の經濟記者等は、よろしくアンチ・ウエストの大運動を起すべきではないか、序ながら近時の新聞記者、殊に經濟記者の振はざるは慨歎に耐えぬ、せめて世間に昔の田口鼎軒位の男があつてほしいものだ、芋の煮えたも御存じない大學教授が原稿料かせぎをする時論を有難く紙面に掲載してゐる彼等の根性が氣に喰はぬ。

閑話休題として英國首相は、尙ほ進んで救済土木事業に一千萬鎊を支出すべきこと、歳入減少の爲め、失業者の救助を十五志に下けること、其の代り "Unemployed workers Dependent Fund" なるものを設け、六ヶ月間失業者の妻に對しては一週五志、子供一人に對しては一週一志、九志を最

高として支出する、其の資金は失業者保險加入者に對し、男——大人——に對しては雇主一週二片使用人二片政府三片の割で負擔することを提案し、更に一層政費節減に努力すべきことを言明し、賃銀低減の必要を力説し、世の産業を恢復せんが爲めには、世界的協力の必要を説いて大きく此の演説を結んだのである。

八

首相の演説が終つてから、勞働黨のクラインスが立つた、彼の演説は勞働者を代表する議員としては、世間人の豫期を裏切る程、それ程莊重だといはれてゐる、そして彼の文章は、無學の勞働者が讀み難いほどむづかしく、古典的色彩を帯びてゐると云はれてゐる。彼は失業問題に就いて「十九世紀と其の後」誌にも彼の意見を發表してゐる、クラインス——それは如何にも好いたらしい男ぢやないか——彼の此の問題に就いて多少の興味を感じる諸君は是非一讀をすゝめて置く彼は演説の劈頭に於いて、實に本日の會議は英國が一轉期を劃したるを示したる者と考へると言つた——さうやたらに廻轉されても困るけれども私は遙に野次りたい——首相の今日の演説は、議會が過去の態度を打ち捨てて、將來益々多數の國民に仕事と満足とを與へる政策を採用せねばな

らぬ事實を示したものであると論じた。

之れまで議會は單に國民が仕事を失つた場合に、僅かなる保險利益を得させる爲めに、多少の便宜を供したに過ぎなかつた——日本の勞働者はそんな便宜さへ得てゐぬのであるが——しかも其れさへが、時々、一時的に、限られた不十分のものに過ぎなかつた。然るに今日の首相の演説に、若し何等かの意味があつたとすれば、人を馬鹿にしてゐるとジョージは苦笑したらう——それは議會が事業を確保し、人民に仕事を與へる爲めには、議會的、金融的方法によつて、世界の一般的産業問題に入込むべき義務を負ふ事を承認した事を意味する。即ち首相今日の演説は國又は議會が此の國の勞働階級に對して、大なる義務を負ふ事を承認したる第一歩なりと我輩は解釋する。さう述べて彼は他日の爲め、總理の演説に太い釘を一本打ち込んだ。

總理大臣は現今の難局の原因を戦争に歸して居る、が我輩は平和條約それ自身又其が重大なる原因なることを指摘せんと欲する、しかも其の平和條約は自身か締結に参加したるものではないか、首相は今日我々に長々とナポレオン戦後の經濟史を講義されたが、此際我輩は、すつと以前首相が院内に於いて、と云ふよりは寧ろ院外に於いて、どんな事を喋り散らされたか、それに就いて首相

の記憶を呼び起すことも強ち無用ではあるまいと思ふ、必ずしも不當でないであらうと信ずる。

私は今日首相が奈翁戦後の經濟史を説き出されるのに耳傾けつゝ、寧ろ吃驚した、さうして千九百十八年又は千九百十九年の總選舉の當時、首相が如何に巧に、又繪のやうに、將來自らが率ゆべき新議會と共に、希望に輝いた新世界が生れるかを國民に——恐くは世界に對して宣傳されたかを思ひ出した。

若し首相にして、吾人が今日ナポレオン戦争の如き、難局に遭遇するのが、事物自然の理にして避くべからざるものであると信じ、國民がそれに止むを得ず屈伏せねばならぬものと考へるなら、しかも輿論の壓迫に耐え難く、今日提案されたる如き諸政策を實施せんとならば、首相は宜しく將に態度を明白にすべきではないか、或時には新世界の出現を誇張し、或時には國民の苦痛も己むを得ざるを説くが如き、曖昧模稜の態度を打ち捨てられんことを我輩は希望する、さう云つて彼は閻魔が持つ釘拔のやうな辯舌で首相の二枚舌の一枚を引っこ抜いたのであつた。

我國の首相も戦時中の積極主義から、無い袖は振れぬ主義に引越したものでらしい、今議會に於けるクラインスは誰であるか、そは兎に角クラインスは然かし此際私共は、あまりにコントロバイン

ヤルであるべきでない」と云ひ、進んで政府案に堅實なる批評を下して大體に於いて賛成してゐる。彼は出征軍人の移民補給に於いては、植民地に於いても失業問題が起つてゐる現状に照して、政府は出征軍人を更に異郷に於いて失業に苦まざるやう保證すべきである」と云ひ、失業保護法の改正に就いては、労働者中同法の恩恵に浴するものは、非常に少數であるのに、這般の改正によつて何程の効果を奏すべきや疑はしい、のみならず失業者の家族中、單に妻子に止り、老父母其他の身よりの者に及ばぬは残念だと云つた。

生産費低減は彼と雖も異議はないが、勞銀は生産費の全部ではないこと、そして勞銀は現に可なり低減されてゐて、此上削減すれば、労働者の能率を損する惧あることを指摘した、然るに社會には尙ほ随分餘計の金を持つてゐる人があると見え、最近或婦人の、婚禮の御祝物が二十五萬磅に上つたと云ふ新聞記事がある、固より彼女の歡喜には同情するが、かくの如きはまだまだ生産階級即ち労働者に分配されてもよい、多くの富が國內に存する事を示してゐると云ひ、資本家の利潤低減の必要を説いてゐる。私も此邊の所説には大に賛成で重役賞與を其まゝにして、労働者の取り前を減じてゐる會社などが、日本に多數あるのに憤慨に耐えないのである。次いで立つた者はアスキキス

であつた、更に多數の陣笠が立つた。しかし議會記者でない私は此邊で切り上げて、此の自分ながら面白くない物語を切り上げるであらう。(一九二二)

經濟主義の先驗的考察

經濟行爲の根柢には「最小の勞費を以て最大の效果を得る」と云ふ。謂はゆる經濟主義なるものが横はつてゐると解されてゐる。此の故に組織せられたる經濟學なるものを學し、又た經濟を生きんとすれば、必ずや謂ふ所の經濟主義なるものゝ當體を、徹底し抜本し究明せねばならぬ。

謂はゆる經濟主義なるものは、私共が、少くも現代にも於いては、經濟とは、全然無關係なる行爲に於いても、此の主義を基として行爲さるゝが故に、行爲が此の主義——寧ろ此の規範と云ふが適當であらう——に基礎すると否とによつて、經濟行爲なるものゝ限界は定めがたい、然かし諸他の行爲が、此の規範に則ることは、固より經濟行爲が此の規範に則らざることを意味し能はぬ。私に寧ろ人間の悉くの行爲、即ち行爲の最も廣き意義に於いて、知情意の働きの悉くが、此の規範に則るものでは、なからうかと思ふ。

最小の勞費によつて最大の效果を得ると云ふことを、其の文句に拘泥することなく、言ひ換へれば、經費とか、犠牲とか、最小とか最大とか云ふことばに強き意味を附着せしむることなしに、凡ら

ゆる精神現象——それは同時に自然現象にもあると考へうる——を目的と手段の二に分ちて構成する立場に於いて觀察し、其の目的と手段とは、最も簡單なる關係に於いて規定せらるゝ、例へば二點間の最近距離が直線なりと云ふが如き意味に於いて、目的自身が實現せんことを欲する、さうした規範を謂はゆる經濟主義なるものが意味するものとせば、凡らゆる人間の行爲は、此の法則——内在的命立法則——に支配せられてゐる、換言すれば經濟學者が不用意に、經濟主義と名づけつゝあるものは、「働くものなき働き」たる純粹意志が活動する内面的必然を、一種の立場から觀たものではないであらうか。

以下私は此の考を論證せんと努むるであらう。で先づ經濟とは最も縁が遠いと考へられる、私共が文章を読む行爲に就いて、手段と目的なる概念を明にせねばならぬ。

「花が咲く」と書いてある文章を私が讀むとする。今此の心理作用を反省するに、私は確かに一字一字ひろつて讀んで行く、私の意識には、最初に「花」が現はれ、次に「が」「咲」「く」と順次に顯現する。是等の四文字は、恰も私の頭腦中の何處かに存する多數の文字の貯蓄所、言語の庫から、私の「我」の働きによつて、白紙の如うな頭腦の表面へ引き出されて來る如うに感ずる。

然かし、かやうに文字が顯現する過程を更に反省するときは、私は單なる「花」を引出してゐない「花が」となるべき花を引き出してゐる、即ち「が」と結びつきうる潛勢力を藏する花を引出してゐると考へねばならぬ、何となれば「花」は無數の文字と自由に結びつき得るし、又單獨に何とも結びつかずに顯現し得る可能性があるのに、此の際「花」は「が」とのみ結びついたとすれば、其「が」との關係に於いてのみ、「花」は顯現したと考へねばならぬ、同様に「が」も「咲」「く」も前後と相關する規定に於いて顯現し、更に各文字との關係よりも高次的なる文章の意味が顯はれる。言ひ換へれば私共は一の目的に到達した。然し「花が咲く」の意味は全體の上にある、此の文章の意味は、「花」にもなく「が」にも「咲」にも「く」にもない。水車の廻轉を水に於いても車に於いても見出し得ざる如く、要するに意味は個々に分析されたる文字に於いても、又た文字と文字との關係意識の中にも見出し得ない。意味は全體の上であり、従つて全體の意味が、此の各々の文字の此場合に於ける意味を維持してゐるものと考へねばならぬ。之れを一字一字の立場から見れば、一字一字は全體の意味を含蓄してゐる、それは恰も帝釋天の宮殿に懸つてゐる因陀羅網の如うだ、羅網に懸る珠の如うだ、其の珠の明赫々として、一點曇りもなく、全珠は玲々として各珠に影を現し、一珠の中に餘の一切の珠影を現

はずと云ふが如きである。若し全體の意味が無いとすれば、花……が……咲……くと断れんに意
識されても、意味が成立し得べき道理がない、謂はゆる「存在の前に意味がある」——断つておくが
私は意味は超越してると想はぬ——心理的なる或は時間的なる順序から云へば、一字一字が前に出
て来るか、論理的順序、即ち或事がある爲には、或事が先立たねばならぬと云ふ風に、超時間的順序
に於ては、意味が前になければならぬ、全體が無ければ一字一字は其意味を維持することができな
い筈である。従つて一字一字が現はれたのは、全體の意味を現はさん爲めであると見れば全體の意
味は一字一字の目的であり、一字一字は全體の意味に對する手段となる。之れは文章を読む場合を
書く場合に直ほして考へて見れば最も明瞭となる、即ち目的が先づ存して其れに對して手段が生じ
て来ることを明に知ることが出来る。所でかうした意味を私共が知ると云ふことは私共の意思が其
の目的を達したとも見られ、又意味それ自身が自己の力で顯現したとも見られる、何れにせよ、私
は其れが最も簡單なる手段と目的との關係に於いてあることを論證すれば足るであらう。

先に述べた如うに、私共は多數の文字を知つてゐる、若し之等の悉くの文字が、頭腦の表面に常
に浮游してゐる、言ひ換へれば文字皆が常に意識されてゐる状態にあつたとすれば、此の皆の文字から
ある。

然かし以上の説明は、餘りに比喻に墮してるとされるならば、更に私は一つの實例を上げるであ
らう。戀に懊惱しつゝむづかしい幾何學の問題を解かんとする經驗を反省せよ、幾何學の圖形が戀
人の顔に見えたりして、終に問題は解けぬでもあらう、謂はゆる「氣が散つて」勉強ができないの
である、そこで此の「氣が散る」と云ふ經驗をもつと立入つて考へて見ねばならぬ。私共が普通
に「氣が散る」と云ふことは、自分の目的としてゐる意味が頭腦に浮ばずに、目的に對して不必要な
事が、恰も石油が流れる水面に浮ぶ如うに言ひ盡し難き閃きを以て、又それ自身の、混亂の、さう
だ夢の如うな美しさを以て流動する状態であり、其の閃めきの流轉の中に於いて、或る意味に達せ
んとする努力は、恰も動光の下に細字を讀まんとするが如き努力であらう。かうした事は喧騒を極
めてる室内に讀書する私の毎日の體驗である、同僚間の談話が、私自身の考へやうとすること、

「花が咲く」と云ふ四字が選擇され、結合し、意味が實現するまでに費さるゝ其の勞苦は計り知り難
いであらう。恰も其れは強い光力の、然かしながら動搖しつゝある光の下で、細字を讀まんとする
如うに、終始要領を得ないであらう、かうした状態は、云ふ迄もなく不經濟な状態と名づく可きで
ある。

呼び起さうとする記憶以外の事件を頭腦中に喚起するが爲めに、私の精神の統一は甚しく困難を感じ、讀書の目的が容易に達せられない、私の精神はアークライトの如く強く輝きつつ、エネルギーが甚しく消費されつつ、讀書の用に供し難い如うな状態に陥る、若し凡ての文字が悉く意識に上つてゐたとすれば、謂はゆる氣が散る様な状態となるであらう、であるから人間の頭腦は凡ての經驗を一先づ記憶として貯藏し、其の貯藏の中から、一定の目的の實現に必要な經驗を選択するが如く先天的に構造され、斯くして活力を空費することなしに生活されると考へ得ない事もない、「氣が散る」と云ふ状態は、恰も夢みるが如く、人間本來の働きの弛緩したのである、本來經濟的なるべき精神作用が不經濟となつたのであると考へ得るかも知らぬ。

斯う一應考へて置いて、更に一度先に擧げた「花が咲く」の例を考察するに、「花」なる文字を私は記憶がら取り出して來たと云つたが、其れは古い「花」ではない、記憶の函の中に貯藏されたるが如きものではない、何となれば、私共の心理現象は繰返すことのできない、唯一遍の出來事である、私共の生命は行く水の流れの如く、一瞬の前にも返ることの能きない、不斷の進行であり、純粹の持續であり、今が現在だたと反省するとき、もう其時は過去である、——此の考は固定した時に囚

はれてゐるでもあらう——斯く考へれば、私が「花」と讀む「花」は、私が小學讀本で始めて學んだ花ではない、其の花に何ものが附加されてはならぬ、少くも時間の點に於いてだけでも異なつた花である、新しい花である、全體の意味も亦固より新しい意味である、して見れば「心は既に無き過去を保存して未だ無き將來を豫想」し「我は過去と現在のハイフエンであり」、我は己の内に持たざるものを引き出すと考へねばならぬ、即ち其處に創造がある、其處には過去に無き或ものが生じてゐる、無は有を生じてゐる、無から有の生ぜざるは自然科学の立場に於いては眞理であるが私共がどんなに疑つても疑ひ切れない、直接なる純粹なる經驗、立場以前の立場に於いては、無は刻々に有を生じつゝある、日に日に新にして又日に新である、かく考へれば、先に私が述べたやうな、貯藏された經驗を經濟的に組み立てると云ふが如き説明は成立し得ない事となる、でもあらうが、其れが古きものゝ繰返しにもせよ、又新しきものゝ創造にもせよ、心なるものが經濟的に働くことは否めぬと思ふ、

然かし以上私が述べた如うな意味に於いて、心が經濟的に働くこと云ふことは、心の働くのは、他に存する目的を達するが爲めで、其の目的の爲めに心が經濟的に働くこと云ふ如うに聞える。然かし

私共は心の働きを離れて別に目的を考へられない、心は始であつて終である、手段でもあり、目的でもある、精神の働き其れ自身であると考へる外はない。私共の知情意と云ふが如き精神の働きを離れて、別に人間に生命がある如うにも考へられる、もし其れがあれば、恐くは動物的生命でもあらう。然かし、さうした動物的生命さへもが、意識によつて構成されたものでなければならぬ。さすれば私共は精神の働きの外に生命なるものを考へ得ない、のみならず、私が悉くの働きが経済的當爲に基くと云ふことを論證せんが爲めに、働きの外に主を設け、精神活動の外に生命を立するときは、生命の爲め必要な精神作用が経済的なりと云ふ説となり、従つて経済的なるものが眞であり、美であり、善であると云ふ如うな、どう考へて見ても妥協的な、假に淺薄でないとしても淺薄感を離れ難い考に陥る。私は、かうした實用主義に満足することは能きない、此の不滿を救ひ、此の矛盾を脱するには、エラン、ヴェキタルが見方によつては経済的と名づけうる、内面的必然に支配され、西田先生の謂ゆる「働くものなき働き」が、働くとき此の経済的當爲、内面的の必然に従ふことを論證せねばならぬ。斯くすることによつて私は淺薄感を掃ひ去り、矛盾を免れざるであらう要するに私は論理的要求に對して眞があり、藝術的要求に對して美があり、倫理的要求に對して善

がある如うに、経済的要求に對して得があり、何れもが「働くものなき働き」の内面的の心然であつて、其の見方の相違に過ぎないと云ふことを論じたのである。

論理的要求、それを思惟と云ふならば、其れが経済的要求と同等なる形式に於いて働くことを明にする爲めに、先づ最も簡單なる経済行爲について其の形式を考察し、それと思惟の形式に一々の對應點を見出すべく努めるであらう。

私が飢ゑて食はんとするとき、眼前に一個のパンと一握の麥粉があつたとし、私が飢ゑても食はぬと意志せざる限りに於いて、其の何れを食ふかと云へば、普通の趣好をもつてる限りに於いては必ず私はパンを食ふであらう、かく食ふことによつて経済價値が始めて實現される。

今此の行爲を分析すれば、飢餓を癒やすことが、其の目的であり、パンを食ふと云ふことが手段である、然し單に之れだけならば、それは未だ経済行爲としての規定を受けない、私が渴して水を飲んでも、水が無代價である場合、言ひ換ふればそれによつてのみ渴が癒される唯一の手段であり他の手段と社會的に比較されぬならば——社會が比較せぬならば——経済行爲とはならぬ、経済行爲であるが爲めには、其の目的が實現されるに、尙ほ他の手段が存すると考へられ、其の多數の手

段のうち一が選擇されねばならぬ。故に飢餓を癒すにパンを食ふ方が麥粉を食ふよりも目的がより速に、簡単に達せられると考へねばならぬ、其れが得であると考へ、其れを行爲することに由つて經濟行爲なる限定を受けることとなる。

經濟行爲は財を手段の必要なる一部として實現する、經濟行爲は財に於いて實現する、財は或は有形物であり、或は無形である。そして經濟行爲の目的實現は、争ふ可からざる精神現象である、慾求の満足である、意思の實現と之に伴ふ感情の榮光である。若し經濟行爲の實現が精神的なるものならば、如何にして精神が物質より起るか、心外の物質と身體と云ふ物質の因果關係から異質的なる精神現象が、如何にして突如と起り得るか、これは必ずしも解決に容易なる問題ではない、物質が意識の原因になると考へんが爲めには、私共は物質を意識の外に立せねばならぬ、此くの如きは現代の認識論の承認し難い所であらう。又物質は時間、空間、因果の形式により知的自我の創造にかゝるものとしても、其の物質の對象とならざるとによつて性質を變ずるとは考へられぬ、前例に於ける一塊のパンが飢餓より獨立して存在するとせば、何が故にパンは飢餓の對象となることによつて、突如として異質的なる満足の感情を産出し得るか、それを何れに解するにもせよ、經濟

行爲の目的の實現に於いては、物質の世界から精神の世界、知覺の立場から意志又は感情の立場への跳躍を認めねばならぬ、

斯く觀察するときには經濟行爲は、三方面より規定せらるゝ、第一目的、第二最も簡單なる手段、第三立場より立場への跳躍である。

私は以上の如き形式が精神作用の悉くに存する事を論證し、凡ての精神作用も見方によつては、得と私が名づくる内面的必然により働くものなること、而して眞善美と得とは如何なる意味に於いて相異なるやを明にし、かくすることによつて、經濟なるものゝ根本觀念を闡明せんと試みるであらう、何れにせよ、私は先づ知的作用即ち思惟について之れを考へて見る。

思惟の最も根本的なるは自同律とされる。即ち「甲は甲である」、物は其れ自身と同一なりと云ふ論理の原則である。私の今自同律の原則について見出さんとするものは、此の原則に於いても目的と手段の關係があり、目的と手段の關係が最も簡單であること、及び立場から立場への跳躍があると云ふ三點に歸する、もし此く論じ得れば、「甲は甲である」と云ふことは眞理であると共に得の當爲と見得るであらう。

「甲は甲である」は單なる同語反復でないとすれば、其の意味は自己同一であり、自己同一は此の文章の目的であり、主語「甲」賓辭「甲」及び兩者の關係辭を手段と見るべく、此の原則は自己同一である目的が實現したものと見るべきである。

先づ第一に證すべきは、此の原前に於ては目的と手段の間に立場から立場への跳躍があると云ふ事である。先にも述べた様に、主語「甲」の意識と賓辭「甲」の意識は、何れも唯一度の心理上の出來事であつて永劫に異なるものと考えれば、異なるものが同一ではあり得ない筈なるにも拘らず、思惟は同一を要求する。主語「甲」は賓辭「甲」と同等なものとしても、同一ではないとすれば、同等なるものは如何に近づいても同一にはなれぬ、恰も一と二の間に： $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{8}$ 、 $\frac{1}{16}$ 、 $\frac{1}{32}$ と云ふが如き級數を考ふれば、一は永劫に二に達し得ざるが如くである、然るにそれが同一であるが爲めには、同等の極限に達せねばならぬ、有限から具體的無限への跳躍がなければならぬ、かく考へれば自同律に於いても目的への跳躍があることは明かである。

然かし主語「甲」と賓辭「甲」とは始めから同一であると考へねばならぬ、何とならば心理現象として異なること云ふ思惟の裏には、異なる事が基礎づけられる同一がなければならぬ、然らずんば同一と云ふ目的自身が現るゝ筈がない、思惟が同一を要求するにも拘らず、兩者が異なると考へるには兩者を貫通する同一がなければならぬ、かく考ふれば甲は己に返ると考ふべきであり、其處に何等の跳躍はないやうではあるが、かく考へても甲と云ふ純粹知覺から思惟の世界へ跳躍したものと見ねばならぬ、之れを明にするには、甲を色として考ふれば明となる、私共が赤色を觀て、赤は赤であるとき、端的なる赤 純粹知覺(或は感覺か)の赤は思惟の赤となつてゐる、其處に立場から立場への跳躍がある。

思惟に跳躍があることは、經濟行爲に於いて跳躍があると同一であるが次には「甲は甲なり」と云ふ自同律に於いて、自己同一の目的に達する他の手段があり、其間に選擇があるかと云ふ問題が生ずる。固より自同律に於いては意識せられたる他の手段があるとは云へず、又従つて固よりそこに選擇が有らう筈が無い、もし他の手段があるならば其れは自明の原則ではない、恰も他によつて證明さるべきユークリッドの公理が公理として考へられざると同様である、目的と手段との關係がユークリッドなるが故に、無比にして絶對なるが故に、自明なのである。絶對は凡らゆる比較を拒絶するそれは二點間の最近距離を直線とユークリッド式に考へずに、二點を直線が規定すると考ふるが如

くである、それだけ其關係が絶対に簡單であると云はねばならぬ、外に目的と手段の關係なく其れが唯一であるとは、簡單と複雑の比較を拒絶する、しかし簡單と複雑の立場から見れば、其れは最も簡單であると云はねばならぬであらう。

「甲か甲である」と云ふ意味を、更に執根深く考ふることによつて、甲は甲なりと云ふ事は「甲」と「非甲」とを區別する排他作用、即ち區別と甲が甲に向ふ向自作用即ち統一であることを知る、然らば「甲は甲である」と云ふ事は、甲と非甲を區別し、更に甲と合一すると云ふ如うにも考へられるであらうし、又甲を甲と考へることは、直線に於いて一點を取つて考ふるが如く、無限の限定とも考へられるであらうが、自同律は思惟の其れ自身の必然、論理的要求の必然の行き道として直に自己同一に達するのである、さう考へ得ない事もない。

論理的要求に於いても、目的、最も簡單なる手段、跳躍について一々の對應點をあり／＼と私は認めることが能きる、同時に自同律の發展たる論理の他の原則も得の當爲と同様の形式に於いて見得るであらう。

論理が得なる立場から説明し得るものとすれば、數理によつて要求されたもの、數理を論理の目

的と見て同様な論理が成立つと思ふ。論理から數理に遷るが爲めには想像力を要するとか、同質的媒介者を要すると云ふ説がありとすれば、それは同時に論理と數理の間に飛躍があることを示唆する、此の關係を論ずるには私は餘りに無學である、何れにせよ「自覺に於ける直觀と反省」に於いて論ぜらるゝが如く、凡らゆる科學が手段と目的の關係に於いて考へられるものとすれば、其の思惟の下に横はる内面的必然は、又經濟行爲の後に潜む内面的必然と同じだと云へると私は思ふ。

然かし眞と得とは常に同一だとは云へぬ、それは見方の相異から來ると私は思ふ、得は手段と目的、手段の選擇を其れ自身の要件とするが眞理には、さうした條件を必要とせぬからである、例へば此處に三角形が三つあつたとし、其の角數の總計は幾許なるかを知らんとする時、私共は三々九と乘法によつても九を得、一つ一つ加へても九を得る。得なる見方に於いては乘法が得であるが、眞なる見方に於いては、加法によるも眞であり乘法によるも眞である、乘法は加法 比し思惟經濟的なるが故に、より眞理だと云へぬ、何となれば、眞理は目的と手段、手段の選擇と云ふ立場から常に見る可きものでないからであらう。然かし思惟に於いても同一の目的を達するに二個以上の手段があり、其の手段が豫め知れて居る場合には、常に簡單なる手段によるであらう。引力の法則を考ふ

るに、ニュートンが始めて考へついた時と後人は常に同じ考へ方をしないであらう。後の物理學者は常に林檎の落つる所からのみ推理の歩を進めないであらう。

かくして眞は得として考へうるが、得は眞を規定しない。然かし人間は得を以て眞を規定せんとする欲求をもつてゐるものと見える、何程か現代の傾向である所の、實用にならぬものは眞理でないといふが如き考へ方は、かうした人間の要求に基くのではないであらうか。

得は眞を規定しない、と共に得は又自らの立場をもつ、例に於いて人が麥粉を食はずに、パンを食ふ經濟的判斷は、論理的判斷と形式に於いても、同じでも質に於いても異つてゐる如く見える。かうした經濟的判斷を説明して、最小の勞費によつて最大の效果を得んが爲めであると云ふも、實は必ずしも意を盡してゐない、何故に人間は最小の勞苦を選ぶか、人間は勞苦を欲せずして快樂を欲するが故にと答へるであらう、然かし人間は身を殺して仁を爲す事もあり、遊ぶよりも働くことを欲することもある、其れも快樂の爲めと云ふならば、それは目的と結果とを取違へてゐるものであらう、かくして説明は種々にされるでもあらうが、結極人間の本性だと云ふより外はなくなり、目的に對する各手段の關係相互を比較する心の働きは、内面的必然として得の方式に従ふことになる。

即ち經濟的判斷が論理的判斷と一々の對應點を見出し得るのは、何れも純粹意志の働きなる事に於いて一致するからであらう。然かし其の平等の立場を去つて差別の立場に立てば、兩者はカテゴリーを異にしてると云はねばならぬであらう。

然かし損得の判斷が成立つ爲めには、必ず其の前提として眞偽の判斷がなければならぬ、麥粉は麥粉であり、パンはパンであると判斷することなしに經濟的判斷は成立ちやうがない。此の意味に於いて眞は常に得を拘束する、然れども得の要求は常に眞の要求をも覆さんとする猛烈なる勢力をもつ、そこに眞理と利得との闘争が起る。人は飢ゑるとき石をも食はんとする。キリストが四十日四十夜食はざりしとき、惡魔は石をパンにせよと求めた。人間の奥底には、石をパンならしめんとする要求がある。此の要求は屢々隠れたる眞理を明るみへ引き出す、惡魔は眞理を實用に供せんことを希ふ、天文學が航海の要求から發達し、木炭の不足が蒸汽機關を發達せしむるが如きであるかうした意味に於いて歴史の經濟的説明、謂はゆる唯物史觀には多少の眞理がある、然しかゝる説もつまる所は人間の深みから湧いて來る、熱烈な欲求を顧みることなしには成立ち得ない。創造的意志を没却して歴史は説明し得ない、唯物史觀、經濟制度は創造的意思の上層建築である、恐くは

マルクスやエンゲスは今述ぶるが如き説に反對して唯物史觀を唱へたのであらうが、歴史は更に廻轉しつゝある。然かし私は説の當否は別としても、マルクスの人間的情熱は、必ずやまだく世界を燃やすであらうと思ふ。若し人間の得の要求が自然科学の發達、機械の發達を促したとすれば、眞に對す 欲求、眞理の愛は尙更科學の進歩を促したのであらう、愛は五つのパンを以て五千人を養ふ奇蹟 敢てする、機械と現代の經濟組織は、實に五つのパンを以て五千人を養ひ得る程奇蹟的に生産する、然かし、然れども五千人は依然として飢ゑてゐる。眞理の愛は善にまで結果すべきである。

眞と得とは調和し得べくして然かも互に闘争しつゝあるを説いた私は、次ぎに美と得との關係を考察せねばならぬ。然かし美とは何ぞやの問題を論すべく私は餘りに無學である。それ故美てふ考について唯私の結論だけを述べるならば、私は美とは實在を感情することであると考へてゐる。私共が美を感ずるといふは、對象に於いて我が感情するのである、私が櫻花を見て美しいと感ずるときは、私は櫻花になり切つて感情してゐるのである、それに少しの間隙が認められるとき、美感は忽然と消失する。玉手箱を開いた浦島の如うに私は其の時老いる。對象に於いて我が感情することは、

對象が我に於いて感情してるとも云へる、又た對象が残りなく我の中に取り込まれたのだとも云へる、其の言ひ現はし方は如何にもせよ、私共が美を感ずることに、跳躍があり、立場から立場への移入があると思ふ、即ち私共が全部的な體的な體驗から感情の立場へ跳躍してゐる、此の點に於いて美感することは、論理し、經濟すると同じ形式を踏む。

然らば美を感ずることに、手段の選擇があるか、それは美に對して不敏感な私自身に於いては、自らの經驗にこれを求むることは甚だ困難ではあるが、然かし美を感じ、それを表現せんとする藝術家には必ず手段の選擇が無ければならぬ筈である。美を感ずること、或は美を鑑賞することは、藝術上の製作をなすこととは異なるから、藝術の製作に於ては目的に對する手段の選擇があると云つても、私の論證の材料とならぬと云へるかも知れぬ、が製作するも、鑑賞するも、等しなみに創造と見るならば、それに區別を措く要はなくなるであらう。のみならず、製作を伴はざる美感に於いても、目的と手段が最も簡單なる密接なる關係にあると云つて差支ないと思ふ。マチスは自ら製作に従ふ前に、其の製作の對象な生きて動くまでは、幾日でもそれを凝視すると云ひ、エマーソン文を書く前には、思想の種子を胸中に植えて、思想が自然に生長するを待つと云ふ、ロダンは

又「自然が人間の見るに任せて居るところを辛抱づくで人はやつと會得するに至るのだ——たゞ其れだけである、其れで既に美しい……會得すること——其れは死なない事だ——」と云つてゐる。對象が生きて動くとか、思想が生長するとか、會得は即ち死せざることだなど云ふことは、對象と我との間に存する複雑なる關係、不經濟なる手段が、悉く捨てられて了ふことと解しえないであらうか或人が「藝術とは省略することだ」と云つたのは、美の創造の爲めに、不經濟なる手段を捨てることを意味するのではないだらうか、即ち理智的なもの、不鈍なものが悉く除き去られて始めて、美は生れて来る、美といふ目的が實現するのだと云へないであらうか。

斯く考ふるときは、人間が美を感じる場合も、經濟行爲に於いての如くに、同じく目的があり、目的に對する最も簡單なる手段の選擇がある、跳躍がある、要するに美を感情することも、人の働きである以上、働きの内面的の法則に於いて差異なきが爲めであらう、そしてかく考ふることによつて美も又得なりと云ふも、一向差支がない如うに思ふ。

然かし美は得なりとしても、得は悉く美ならざるは云ふ迄もない、現代の市場生産、大量生産は得が美を征服し終つた現象である。化學染料は何故に天然染料にもまして使用せらるゝか、其れは

美なるが爲めでなく得なるが爲めであらう、私共が現代の陶磁器や織物に、資本主義經濟組織以前の陶器や織物に見るが如き、美しき色を見ないのは其れが爲めであらう。食物に於いてもパン、じゆ、の生産に従事することは、粟稻のものな、かを製作するよりは儲かるに相違ない、琵琶や浪花節をどなることは園八や歌澤を唄ふより儲かるに相違ない。然かし美しさが何れにあるかは、美感にこまかい人は知つてゐるであらう。均一の帽子を被り、均一の洋服を着用し、均一の靴をはき、均一の萬年筆で均一の文章を書くのが現代である、せめて私の御飯茶碗と箸と母のと妻のと小兒のものが、違つてゐるだけはまだ有難いなどと私は時々思ふ。經濟が藝術を征服したる現代よ、私は其れを呪ふ。

然かし「料理は客を満足させると共に、料理人を満足させねばならぬ」と希臘の古賢が言つたことは、私は生産の理想だと思ふ。現代の市場生産は、只金儲けせんが爲めに、生産に従事する、そして労働者の藝術的良心を殺し、消費者たる顧客の美的要求を殺戮してゐる。或は買ふ人があるから賣る人が出ると抗辯するのであらうが、現代の生産は寧ろ供給が先づあつて強ひて需要を刺戟するのである、資本主義の時代に廣告の旺盛なるのを見れば思半に過ぐるであらう。私は得が美を征服した現象を無風流の電柱に見る、電柱の廣告に於いて見る、新聞紙に見る、雜誌に於いて見る、

一切の世相悉くがそれならぬはないのか。

善とは何ぞや、倫理學者ならぬ私はそれに答ふ可く十全に資格づけられてゐぬ、暫く己の如く汝の隣人を愛せよと云ふ事を、善なりとすれば、其處には隣人を愛すると云ふ目的があり、愛するに手段があり、其の愛が強ければ強い程、手段と目的の關係が最も簡單にして密接であると考へ得るのであらうし、又固よりそこに立場の飛躍があるであらう。

隣人を愛するは、我が隣人に於いて愛することを云ふ、われが隣人として知り、感じ、意志することである。愛とは要するに、人格と人格が熔け込んで行くことならば、そこには我から彼への飛躍がある、美を感じることに比して更に全人格的であり、よき全き創造がある、隣人を愛せんが爲めには、衣食を與ふる方法もあり、職業を與ふる仕方もあり、教育をしてやる手段もあり、其の手段はいくらでも考へ得るが、直下に愛することが、一等等に且つ簡單に目的を達し得るものとするれば、直下の愛は愛の實現に最も簡單な、得な方法だと考へ得るでもあらう。人が施しをなすに當つては、施す人もなく、施される人もなく、更に施すべき財物もなければ、初めて眞の布施を成就すると佛典は教ゆる、謂ゆる三昧の域には、目的もなく手段もない、然かしそれを翻して目的と手

段の立場から見れば、その關係が無比にして唯一に、最も簡單にして最も經濟的なる境地と云ふべきであり、それが善の善なるものとすれば、従つて善は即ち得と考へ得られるであらう。

善は即ち得なりとしても、得は必ずしも善ではない、得と善との鬭争は改めて私が説くまでもなく、日々に私共の生活に於いて經驗し、而して人の經濟的地位が高ければ高い程、社會は其の人達に對して、彼等が善ならざる得を取てすることを寛容する、同じく仕事せぬことでも、労働者がストライキすることは社會的な罪惡として考へられ、富者が百で買つた馬の如くに終日ごろ／＼してすることは御仕合せとされ、善行の如くに考へられる。

然かし或る鬭争を善と得との鬭争とせず、得と得との鬭争と考へ、社會がそれを自由競争と名づけ、隅田川のボートレースの如く觀察し、是認する場合に於ても、深く其現象を窺き込むとき、その底に私共は屢々天の使と惡魔の相戦ふを見る、善と得との鬭争を見る、資本家と労働者の鬭争たるロツクアウト又はストライキの如きは、資本家の經濟的利益と労働者の經濟的利益の單純なる衝突の如く見るけれども、實は多くの場合に於いては、資本家が善を棄て、得を取らんとすることと私は考へてゐる。

近世の經濟組織に於いては、企業は單純なる營利である、かうした客觀的と云ふよりは、寧ろ抽象的な事實から企業は單に營利なるべしとされてゐる、存在から當爲が不用意に引き出されてゐる、抽象し構成されたる謂はゆる經濟的事實から倫理的の規範が魔術師の棒先に於いての如く突如として出現してゐる、此の故に資本家は凡らゆる倫理的の要求と凡らゆる藝術的の要求を無視し、安心して而も大膽に金儲けに従事する、資本家は労働者を金儲けの手段、道具として使用することを罪惡と考へなくなつてゐる。私は此處に現代社會に於ける多くのいまはしき罪惡の源頭かあると思ふ。他人の人格も自己の人格も唯目的とさるべくして、手段とさるべきでない、さう哲人カントは云つてゐる、人格を手段にすることは悪魔の仕事である。人は石をバンにせんと希ふ、其の事其れ自身は善でもなく、惡でもない、唯其れは人格を犠牲として行はれるとき眞黒な罪惡となる。もし資本主義の經濟組織と營利の爲めに人格を手段とすることが、不可分離のものならば、恰も金が黄色であらぬばならぬ如く、資本主義が必ず他人の人格を道具にせねばならぬものならば、資本主義の根柢には拭ひ去り難き罪惡がある。社會の發達が「文化への意志」でなければならぬならば、資本主義は當に滅すべきものであらう、若し又資本主義も労働者の人格を無視せず、労働者の肉體的要素のみならず、倫理的藝術的要求をも満足せしめ得るものならば、資本主義は當に其道に向つて歩むべきであらう。何れにせよ階級闘争が單なる經濟的闘争であるとき、其の闘争は滅亡の外、何ものをも生み出さぬであらう。然かし其れが善の闘争となるとき、そして人が善ならんとするとき、社會の進歩をうむ、希くは階級闘争をしてガブリエルと悪魔との戦ひたらしめよ。

眞も善も美も悉くが得と考へ得られる、然るに他方には眞善美と得とは終始相矛盾し、不斷に相闘争する、其の矛盾を如何に調和せしめ得べきか、其の闘争は如何にせば理想への發達たらしめ得るか、四者の統一を那邊に求むべきか、私共は水と油を混じ得ない如うに、若し此の四つのものが根本的に異質的のものならば、究竟の統一は期すべくもない、私共は一を取つて他を捨てねばならぬ、然かし此の四者は根本に於いては異なるものでない、其の闘争は立場の混合より來り、人間から四者を別々に切り離すことから生ずると私は思ふ。

試みに、私共は物理的自然界を觀察して見やう。落つる林檎は何故に曲線を描いて落ちないのであるか、光は何故に眞直ぐに進行するのか、水は何故に高きより低きにつくか、電流も熱も何故低きに赴くか、悉くが最も簡單なる道を選んで動く、言ひ換へれば經濟的必然に従つて運動しつゝある

ではないか、物理學者は之れを經濟法則と云ふ。然かし水の流るゝも、光の映するも、電光の閃めくも、眞即美である、而して其れは無限への展開であると共に又闘争である。而して闘争は又眞にして美ではないか、水の高きより低きに就く經濟的必然は、やがて平等の理想に赴く闘争ではないのであらうか、仰いで華嚴の瀑布を望み、俯して金剛川の激流を視た人は、自然の闘争を直下に感得し得たであらう。然れども達せられたる平等の理想は、更に又達し難き理想を生み、其處に又展開と闘争が始まる、嘗て北太平洋の濃霧の中を航行した、波濤は艦々として草味の樂を奏した、濛々漠々たる白霧は創生そのものであつた、それは又理想への闘争であらう。物理學者が自然現象を經濟的と見るとき、彼はアツジジのフランスの太陽讃歌に於いての如く、自然を神の——大なる人格——の象徴として見てるのでないだらうか、落體の直下を經濟的と考へる爲めには、落體は如何なる道をも選び得る自由があると考へねばならぬ、此處に於いて物理學者は無限の可能を含む「人格の射影圖」として自然を觀察するとせねばならぬ。自然が人格の、自由にして絶對なる人格の象徴となるとき、そこに渾然たる統一がある、私はエマーソンの「自然は人生の象徴なり」と云ふ語に深き意味があると思ふ、得と眞と美は自然する自然に於いて最高の善となる。

人間の理想は人間することである。それは石に彫られたる因襲道德の奴隷となることではない、私共は此點に於いてニイチエの如く強くなくてはならぬ、之れを人性の實現と云ひ、自我の實現と云ふもよいであらう、然かし其れは考へられた人性、固定されたる自我の實現であつてはならぬ、それは唯人間することである、人間することに於いては、主もなく客もなく、絶對することであり無限することである、人間することに於いて凡ての矛盾が調和する、人間するとき物理學者のマクスウエルが考へた如うな、氷が白金を熔かす、人間するとき流水の聲を踏斷する、其れは純粹の行爲の世界である、經濟は人間することの一斷片である。それはミロのエヌスの腕の切れ目である、經濟學は大理石像から藝術美を抜き去つて、石の破片を研究するものであつてはならぬ、經濟を人間する一斷面と考ふることに於いてのみ、得即眞、得即美、得即善となり得る、球體を平面を以て切斷するとき、切口が常に圓となる如く、人間の行爲を人間することによつて切斷するとき、經濟は眞善美と合一する、經濟は人間することによつて必然的に制約せらるゝ。

人間することは永久に達す可からざる地平線に向つて出帆することだ、地平線は達し難き極限だ、平等だ、寂滅だ、此くの如き意味に於いて人間することは闘争である、人間社會が人間社會す

るとき、理想に向つて船出するとき、それに向つて進むとき、古き意味の闘争は止み、新なる意味の闘争が起るのであらう、向上は闘争である。

階級闘争を毒々しきものたらしめ、血なまぐさきものたらしめるのは、經濟を人間から切り離した爲めである、即ち經濟學を自然科學として取扱つた罰である、マルキシズムに對するクロチエの批評は正に其れを意味する、經濟學は充實せる具體から空疎なる抽象に引越し、翻つて空疎から充實を支配せんとする、そこに罪惡が根ざす。

經濟學を人間することの一斷面として取扱ふとき、矛盾は調和となり、闘争は文化への意志となり、死滅は化して創造となる、ラスキンの經濟原論たる *Munera Pulveris* には、かう書いてある。

「若し彼が善にして美なる諸物を生産し、そして造るならば、諸物は彼をレクリエートするのであらう、レクリエートてふことばの權威と重要さに心せよ——若し惡にして醜なる諸物ならんか、諸物は彼を「腐敗」せしめ、「引き裂く」であらう——即ち諸物の力の正確なる度合に彼を殺すであらう。

經濟が學問と藝術と道德とを征服し、支配せんとする現代社會に於いては、經濟は正に死出の旅

路である、ラスキンの此ことばを現代人は深く味はねばならぬ、資本家は、現代の如き方法に於ては金儲けが罪惡なることを心から知らねばならぬ、經濟學者は大理石から彫像の美的價値を批判してはならぬ、經濟學に倫理觀の混入を拒絶するはよい、然し其の結論を以て人間社會全部を律してはならぬ、それは寡奪である、私共素人、ブレーンマン街頭の人間は、殊に峻嚴なる態度を以て、寡奪的經濟學者に對抗せねばならぬ。經濟學教授は試験の答案に點をつけるがよい、人生に點をつけてはならぬ。

私は長たらしくも、人間の經濟行爲が、人間の奥深きに根ざす内面的必然たる事を指摘した、そして眞も美も得も人間することの一斷面であり、善は人間することだと云つた、それは學者達から見れば、餘りに獨斷的な述べ方でもあらう。經濟學の祖父と云はれる、アダム・スミスは經濟は人間の利己心に基礎づけられ、人間が利己心により自由に競争することによつて、社會は其れ自らの力で善くなると説いてゐる、然しスミスは利己心を是認しても、それは正義に従はねばならぬといひ、彼は正義を無視した競争や獨占は社會の發達を害すと説いてゐる、私の謂ふ所の得なるものは、己とか他とか、利するとか利せぬとか云ふのではない、其れ自ら最も根本的なる内面的の必

然であり、それが人格的に實現するとき、人間されるとき、得は自ら美であり眞であり善であることを主張するのである。スミスの經濟學はその時代の社會の個性を説明した歴史であると私は思ふ。今のことばで言へば、普通の學者が説くより、より少く自然科學で、より多く文化科學である。人間社會の個性を説明したものである、スミスの「諸國民の富」は彼自らも知らざる意味に於て歴史であるそれは個性をどこ迄も没却し盡さんとする、自然科學たらんことをねらつて、人達の意味する經濟學とは大に趣を異にしてゐる、私は現代の經濟學は最も深き根柢からスミスへ復ることによつて經濟學者の纂奪の害毒を除きうると思ふ。私共素人は部分せず全體せねばならぬ、學者せず人間せねばならぬ。完くして大なる人間キリストは學者と豚が大嫌であつた。

自然と經濟

一

土地を、勞働、資本、と鼎足の如く對立させ、生産の三要素として論ずることは、經濟學に於いては舊るい習はしと見える。然かし土地のみを生産の要素として論ずるのは狭い。第一土地の上には空氣もあり水もある、水と空氣が無ければ人は生きて居られぬ、のみならず、人類の勞働の對象となるべき木材とか、金屬とか云ふ如き自然物も數へねばならず、電力あり蒸汽力あり、水力あり風力あり、若し自然物と自然力とが、生産に必要な場所と材料と力を與へる意味に於いて、生産の要素を爲すと云ふならば、生産の三要素としては、自然、勞力、資本と分け、土地は自然の項目として論ぜらるゝのが至當かも知れない。さればさうした分類法に従つて書かれてる經濟書も多數ある。

生産の要素たる自然の項目として土地を論ずることは理窟として承認すべきには相違ないが、さて經濟書に實際書いてある所を讀めば殆ど土地以外に出でないものが多い、ほんの申譯に氣候、

地形など、項目だけ、やう、やう、さんに並べられてあるが、中味はとんといい。讀者は甲乙丙丁 A・B C・Dの網に包まれるが關の山だ。中には土地を自然の一項目として論ずるが至當であると力味返つて論ずることが、自然に關する記述の正味身代の本もある。して見れば結極長たらしく空理を述べ立て、理智の遊戯をした迄に過ぎないかも知れぬ。屁理窟と煩い分類とは、其のもの其れ自身だけでは、人の生活には何の價值も齎らさない。要するにプラグマテツク、パリュエーが無い。そんな風に英國の學者などは考へる風があるのであらうか、獨逸の學者などが、疇性に規則正しく分類して行かうとするのを、知らぬやうな顔をして、いきなり土地と切り出す。

然かし彼等は Land と名前はつけて居ても、實は其の意味を殆ど全自然を掩ふに至るまで擴張する。例へば「Landとは、人類が其の供給を増加し得ざる效用の永久の源を云ふ」など、定義したりする。若しこんな迄も、其の定義を擴張する必要があるならば、潔く降参して自然と云つたらよさうにも思はれ、徒なる傳統にしがみ付いてるに過ぎない憾があり、聊か古い革袋に新しき酒を盛るの譏が無いとはせぬ、が論ずる正味が結極土地に過ぎないとすれば、名は實の賓として土地と云ふも悪くはないであらう。

日本又は支那では古來土地と二字重ねて用ゐる。土の字義を研べて見るに、最初の字形は、横の一線の上に、小さい黒丸に縦棒を通したものが重ねてある。横の一線は平らな地を象徴するのでもあらう。大陸の海のやうな平原に立ち盡して、地の象徴を示せと問はゞ、何人も隻手を動かして横に一線を畫するでもあらう。Horizon を譯して地平線と云ふ、地はどうしても横の一線に因縁がある。黒丸に縦棒を突き通したのは、「草木の實が地下に核を破りし萌芽將に地上に出でむとする時に地表の斥裂する指事」なりと物の本に書いてある。して見れば説文に「地の萬物を吐生する也」とあるも悉く訛なりとして退くるにも及ぶまい。

土の萬物を吐生する方面のみに着眼すれば、土地が植物を養ふ力や成分に重きを置くことになり英語の Soil の意味に近くなる。實際支那の古典には土は土壤の意味に使はれてる場合が澤山ある。例へば禹貢に「禹土を敷く、山に隨ひ木を刊りて高山大川を奠む」とあり、土を敷くとは字通りに沼などに土を敷くことであらうとは思はれる、が馬融は敷を分なりとしてゐる。して見れば土は寧ろ地と解さねばならぬかも知れぬ。然かし「厥の土は惟れ白壤にして、厥の賦は惟れ上の上錯はり」など、ある場合には、疑もなく土壤の意味に解さるべきである。

土の字に於ける横の一線に主として着眼すれば、土地全體を意味し、英語の earth に當るかも知れぬ。「普天の下卒土の濱」など、用ゐられた場合は、寧ろ天に對する地を意味するものでもあらう。然るに天が人間を超越した精神的存在として觀念さるゝと共に地にはいくらか非精神的な、唯物的な意味が伴ふて來た。かくして具象的の土に抽象的な意味が附加され、物的自然を象徴せんが爲めに地の字が出來たのであらう。

地は土の傍に蛇の象形が付いてはゐるが、實は其の象形には意味が無く、音符の役目を務める爲めに付けられたものらしく、也は女陰の象形で、天の陽に對し陰を意味するとの説もあるが、附會の説とされてゐる。

地の字は夏殷周三代の吉金文字には見出せぬと云ふから土字よりも後代に出來たものであらう。易には三を乾として天を徵象し三を坤として地を徵象する。乾坤はベビロンの天地を意味する語と音相通すると云ふ。象傳には地の字も用ゐてあるが、恐らく易は普通に信ぜらるゝより後世の作であらうから、土より前に地の字が出來た證據とはなるまい。

何れにせよ土地の二字は、經濟學に於ける生産の要素又は條件を云ひ現はすには、都合の好い文

字とする。何となれば土の文字は水に對する意味もある、即ち「天の下の水は一處に集りて乾ける土顯るべし」と云ふが如く、昔からの用法にも合し、一方土壤を意味する所から、植物を養ふ化學的性質をも現はし得る。然るに地は、「大地が崩れても此ればかりは大丈夫」などと云ふやうに、萬物を支へて行く物理的作用をも表はし得る、と共に地は天に對して用ゐらるゝが如く、廣く物的自然を言ひ現はすに用ゐられるから、吾人は土及び地の二字を重ねれば、土地の項目のもとに、つちの事のみに限らず、廣く自然的の要件を論じて良いと思はれる、が土地にそんな意味を故事つけるのはおかしいと云ふ感もないでは無く、「自然」と用ゐ慣れてるものとすれば、それでも良い。

二

土地の表面は空氣で包まれてゐて、人類は其の空氣を呼吸して生活する。僅かの時間でも空氣の呼吸を差し止められるれば死んで了ふ。此の點に於いては、流石の人間もてんで意氣地がない。空氣はそんなに人間にとつては大切なものだけれども經濟的の價値はない、それは澤山ある爲めに外ならない、そう經濟學者は吾人に教へる、然かし人類の社會性と云はうか群聚性と云はうか、それが餘りに極端に發揮される爲のと、人類の火を利用する特性が餘りに放肆に發現し來つた爲めと、

それ等の理由に因つて、人類の生活に必要なとする清浄な空氣に漸く缺乏を感じ始めて來たことは、近世文明を特色づける現象と云はねばなるまい。即ち現代に於ける大都會の空氣は、大概煤烟や塵埃で肉眼で色付いて見える場合もある程濁されてゐる、それが爲めに市民は甚しく健康を傷ふ。桶の水が悪くなるとき鯉がブカ／＼口を水面に上げるやうに、紐育倫敦邊の人は新鮮な空氣に慣がれてゐる。彼等は新鮮の空氣を吸ふことを主たる目的として郊外を散策する。東京人が郊外へ出るのは、まだ何程か景色や食物に中心がある、新鮮の空氣を吸ふことは二の町であらう、目黒へ栗飯を食へに行かうと云ひ、荒川へ花見に行きませうと誘ふ、新鮮の空氣が健康維持に必要なことを自覺すること程左様に東京の空氣が汚れてゐるぬのでもあらう。

倫敦人が夏になると海濱や山地へ行くのは、必ずしも倫敦が暑いからでは無く、東京人の避暑とはいくらか意味が違ふ。やつぱり濁つた空氣から逃れ出て、澄んだ空氣を存分呼吸しやうと云ふ了見に相違ない。だから石炭を完全に燃焼させて煤烟を少くするとか、又はいつか日本で發明されたとか傳へらるゝ煙突の中へ針金を通して、それに電氣を通じて煤烟を吸収させ、集めた煤烟からは染料を製する、そんな發明が若し手軽に經濟的に出来るものならば、大に人類の生活に貢獻する所

があるであらう。

東京邊では未だ左程普通の家で石炭を多く使はぬから、紐育や倫敦と較らべて煤烟が少い、倫敦のサポイ・ホテルと云へば恐く一流のホテルであらうが、そこで皿の中に小さい煤を見出したことさへある。そんな風の所から見れば、東京の空氣は煤烟によつては餘り汚がされてゐぬと云ふべきであらう、現にカラーやカフスの汚れ工合を比較しても解かる、然かし市の中央部に近く、砲兵工廠の煙突が林立して、どす黒い烟を遠慮なく吐き出してゐるが如きは感心せぬ。數年前淺野セメント會社の煙突から吐き出される烟が有毒だとかで、一時問題となつたやうに記憶するし、上野公園の樹木の枯れるのも、汽車の煙のせいだと云ふ。都市には遠いが小坂鑛山の煙毒問題も有名である。紐育のリバーサイドは名の如くハドソン河に面し、樹木も繁り、住居地として格好の街であるが、近頃對岸のチャーサー市に工場が澤山できて、風向きの工合によつては、河を越えて煤烟が飛んで來て、たいへん空氣を悪くし、居住者の健康を害し、其の理由で損害賠償の訴が提起されたとか聞いた。

何れにせよ石炭を燃料に使ふ事が廢止され、電氣を代用するか、さもなくば煤烟が全く石炭の燃

焼から取り去り得たとすれば、人類は餘程幸福になるだらうと思ふ。

煤烟で空氣が悪くなるのは人爲であるから、何とか方法がつくかも知れぬ、が東京のやうに、風がもて来る砂烟に、空氣を悪くされるのは自然の仕業であるから聊か持ちあつかう。それも然かし道路の改善によつて幾分防止できるであらう、が北京のやうに春先きにかけて蒙古邊の砂漠の砂が空を暗くする程の勢で押し掛けて来て、字通りに紅塵萬丈の巷を現出する場合には、防ぐにも防ぎやうがあるまい。然し此の砂が直隸邊の野に降つて、肥料の働きをすると云ふから、ナイル河の洪水の如く一種の天恵とも見らるゝ。

こんな風に地球の表面が、異なつた空氣で包まれる現象がある爲め、空氣を一立方呎いくらと値段をつけて、賣買することは、潜航艇用かなどの壓搾空氣に就いて想像し得るに過ぎないが、空氣のきれいな地方では、空氣其のものとしての價格ではなく、間接に其の部分の地價を高かめる。佛蘭西のニースやサン・モリッツに於ける不毛の土地が、一平方メートル數百フランの値段に賣買されるのは、他の場所には得られない、空氣と光線に對して高い代價が拂はれる爲めだ、そう或本に書いてある。實際ニース邊の空氣は明るく澄んでゐて、海添に延びる青磁色を盛り上げた櫛櫓の繁み

の中を歩きながら、時折り瑠璃色に躍る海原を眺めやるだけでも、命が延びるやうな氣がする。が其の地の教會には、年若き美人の墓が多いと云ふ、肺病の療養に來て、はかなくも花の命を落すからでもあらう。

氣候が民族の氣質を左右し、文化に影響を及ぼし延いては經濟現象を左右することは、大概の經濟原論に論ぜられてゐる。思ふに空氣の色も氣候の一要素として社會の文化に影響し、殊に繪畫や建築には最も見易く現はれる。ペランダの付いた建物はどうかと云へば南國の明るい空氣の下に多く、ペー・ウキンドーは英國のやうな暗い國に適する。獨逸邊の人が、南國々々と伊太利を慕ひ「ナポリを見てから死ぬ」と云ふ諺さへある位であるが、かくまで慕はれる重なる理由の一つはイタリアの空氣が、北歐諸國の空氣よりは、透明で晴々してゐる爲めであらう。露西亞や和蘭の繪畫よりは伊太利、佛蘭西の繪には概して明るい趣きがある。英吉利の田園では、天氣の晴れた朝か又は夕方には、薄絹のやうな霧が掩ひかゝつて、遠くにある樹木が却つて近く見えるやうな趣がある。ウキンドールの夕暮、「こんな趣をターナーが描いたのです、そして其れは彼の特技です」、そう或英國人が私に説明した。嘗つて長江を下つて、鄱陽湖邊の山水を見、正に南宗の青綠山水だと思つた事があ

る。南宗畫が江浙の間に發達したのは、あの邊の空氣の色が産み出したものではないかと思つた。日本畫は支那の影響を多量に受けてゐるけれども、四條派や圓山派には、いくらか日本固有の空氣の色が現はれて居り、近頃の日本畫に朦朧たる趣があるのは、無論それのみではないにしても水蒸氣を多く含んだ、日本の空氣が産み出す傾向かも知れない。

こんな風に氣候の工合が繪畫や建築に影響を及ぼし、各國各様の趣を生ずる爲め、それを享樂せんとすることが自然に人々の強い慾望となり、交通機關が發達するに従つて、漫遊客は非常に増加する。米國の漫遊客が英國に落す金は、戦前に於いては毎年四千萬弗に達するとスタテスト誌は計算してゐる。そして之れは米國が英國へ支拂ふ金の一重要項目で、英米爲替變動の一原因を爲してゐる。同様の關係は伊太利瑞西と他の各國の間にもあることであらう。

倫敦の冬は、霧の爲めに鬱陶しいことは人口に膾炙してゐるが、十二月頃朝飯のテーブルで同宿者と顔を合はせ、今朝は結構の御天氣で、など、御互に挨拶する時が、どうかと云へば、空は黝色の雲で閉じ込められ、今にも泣き出しさうな天氣の時で、我々日本人には如何にも取つてつけの御挨拶のやうにも思へる。ナイス、モーニングと云ふのは何も降らぬと云ふだけの意味を現す爲めに

使ふ言葉かなどと思つた。

英國でも春や夏は左程でもないが、伊太利や佛蘭西に較らべては遙に陰鬱な事は云ふまでもない。若し太陽のエネルギーが其の儘生産に利用さるゝ發明があつたら、英吉利の經濟上の地位は變るだらう、など、佛蘭西の經濟書には書いてある。

生れてから死ぬまで、あんなに陰氣の空氣の中に呼吸してゐるアングロ・サクソンは自然ラテン人種などに較べて氣が重く、いやに落ち付くものと見える。「御國に参りまして御國の方々が、地下鐵道に乗るにも、バスに乗るにも皆が落付いて、よく順序を守り、少しも混雜せぬのには感心しました何か特別の社會的教育法とでも云ふものが、昔からあるのでせうか」、そう倫敦のミッドランド銀行のハイド氏に尋ねたら、「社會的教育法など別段取立てゝ云ふ程の者はありませんまい、恐らく氣候が陰鬱で皆がのろくさく育てられる爲めでせう、蘇格蘭へいつて御覽なさい、その人達は私共よりも更に落付いてますよ」さう謙遜して答へた。此論法で行けば、東北地方の停車場などでは混雜がなかりさうであるが、さうでも無い。が英國に於いて一つの原因を爲してはゐるだらう。

或る心理學者は、宗教上人を二つの型に分けて、一を「ワンズボーンタイプ一生型」、他を「トワイブーンタイプ再生型」とした。一生型

の方は母の胎内から此の世へ顔を出しただけで、別に苦勞もなく神と合一し得る人達で、再生型の方はもう一度聖氣によつて生れ直す必要がある人達とする。前者の宗教的情緒はいつも樂觀的で人生の罪とか、贖ひとか、そうした事は餘り気にせず、始めから好い氣持で神様のなかに浸り込める、従つて頗る陽氣である。が再生型の人は悲觀的の宗教感情をもち、自分の罪が氣になる、先づ此の罪から聖められやうと精神的に惡戰苦闘する。従つて聖められた後でも、幾分陰氣である。然るにラテン民族は概して一生型で、アングロ・サクソンは再生型が多いとある。之れも氣候が陰鬱で、考へ込む人達が多い爲めかも知れぬ。ミルトンは「詩神の降臨は秋分から春分までにあり」と云つたそうだが、して見れば失樂園は明るい空氣を呼吸しつゝ賦せられたものではあるまい。

「佛國には百のソースと一つの宗旨、英國には一つのソースと百の宗旨」だと云はるゝ。英國人は佛蘭西人が、料理について敏感であるが如く、宗教について敏感で、あれでも無い、これでも無いと随分色々の宗旨がある。が料理にはてんで無頓着で、随分立派の人でも、巧く出來てる料理にいきなり多量の食鹽をぶつかけたりする。要するに料理にかけては田吾作が多い。だから佛蘭西から立派の腕前を持つてるクツクを雇つて來ても、二三年すると腕を悪くすると云ふ。中學で學んだフラン

クリンの自叙傳には自分は、貧乏の中に育つた賜として、何處へ旅行しても食物に就いて不自由や不快を感じる事が無い、など書いてあつたやうに記憶するが、英國人の各々も何程かそうした素質を持つてるかも知れぬ、英國人を妻にしてる佛蘭西人が妻が料理に無頓着なのを滲してゐた。

自國の氣候は陰鬱であるし、食物などは餘り気にせぬ、おまけに海に圍まれてゐて、航海は平氣である。そんな英國人が自分には一番氣になる信仰の獨立の爲めに、米國へ渡つていつたのは自然であらう。そして彼等が他國の移民を追ひ越して、米大陸に一大民主國を築く礎となつたのも無理はないかも知れぬ。そして米國は今後の世界には、第一等の經濟力を有する國となるであらう。

氣候が産業に影響を及ぼす實例として、ランカシャーの空氣が、紡績業の爲めに、てうど都合よく濕氣を含んでる爲め、其の紡績業が發達したことは、よく上げられる實例であるが、近頃は人工的に濕氣を工場内に容易に製造し得る爲め、氣候は左程氣にするに當らぬと云ふ。日本に漆器製造業が發達したのも、空氣が濕つてる爲めではないかと思ふ、あまり乾燥した空氣の中では、ピンク跳ね返りはしまいか、其の道の人に質したい。

三

地球の表面は、三分の一を陸地が占め、二分の二を水が占める、人間は陸に棲む動物だ、そうした點から見れば、陸地がもつと多かつたらよからうに、そうも思はれる。然かし逆に地球の表面の三分の一が水で他の三分の二が陸であつたとすれば、恐らく雨量は非常に減じて、地表の大部分は砂漠になつて了ひ、折角陸地が増加しても、人も棲めず、食物も出来ない面積ばかり増える事になるかも知れぬ。それよりか大は鯨より小はめだかに至るまで、或は廣きは昆布より細きはひじきに至るまで、或は蝶螺の蝶々たる圭角より海鼠の圓轉滑脱たるに至るまで、千種萬態にして而も豊富なる食物を人類に供給する水が地表を占領しててくれた方が、人間には徳分かも知れぬ。

のみならず假に陸続きとすれば、とても寒くつて人の住むに堪えぬ地點を、暖流が岸を洗ふ爲めに、中和な氣候を享樂し得る所としてくれる場合もある。例へば英吉利の如きは、メキシコ灣流がなかつたら、随分寒い國となるであらうから、今在るが如き經濟の發達を見たかどうか疑はしい、其の代り寒流の爲めに案外寒くされてる地方もあるではあらうが、潮流の人類に及ぼす影響を差引計算すれば、寧ろ人類に幸してると地理學者は云ふ。

我々の肉體の外にある水が、如何に人類にとつて大切なるか、それは略ほ明にされた、では眼内に放つて我々の肉體を觀察したらばどうか、其處にも水が頗る重要な役割を演じてゐることが知られる。即ち地球上に於いて陸が三分の一を占め、水が他の三分の二を占むるが如く、身體の三分の二は水で出来てゐる身體は主として水から出来上つてると云ふも過言ではない、即ち水は血液やリンパ液の成分となり、血液中に存する血球の養素、排泄物等を運搬し鹽類を溶解し、電離し、組織を適宜に膨脹させて曲線美を按配し、體温を調節し、食物を咽喉から胃へ、胃か腸へ、腸から肛門へと運搬する幾分の力となり、食物が消化器内で化學的變化を受けて消化される際の手助けとなる。だから若し水が無かつたら人間は一日も生存することが出来ぬ。そう醫家は我々に教へる、地球の表面に於いて水が三分の二を占めてゐれば、人體に於いても水が三分の二を占めて居り、地球に於いて水が氣候を調節する作用をすれば、人體に於いても體温を調節する役を務めてゐる。しかして人體に於いて水が運搬の役目をするやうに、地球上に於いても、水は人類の交通を容易ならしむる爲めに缺く可からざる働きを爲してゐる。獨逸の經濟學者の或者は、經濟史を觀察して實物經濟から貨幣經濟に移したと説き、或者は村の經濟から町の經濟、封域の經濟から國民經濟と

段々に發達したと云ふ。其の何れに従つたにせよ、要するに經濟の範圍が段々に廣まつて來たことに歸着する。そして斯く經濟の範圍が廣まるが爲めには、交通の發達を前提とし、しかも交通の發達には水の貢獻する所甚だ多きを知らねばならぬ。

若し人間が水を渡るに、船なるものを造ることを知らなかつたとすれば、如何に彼等が水泳に達者であつたにしても、水は人間の交通を却つて妨けたでもあらうが、船の發明は人類と共に古いものと見え、水は人間の交通には餘程の便利を供してゐる。沙漠を一千哩旅行するには六十日を費す、然るに風帆船でさへ大西洋二千五百哩を五十日で渡る。鐵道が發達した現今の世界でさへ、海の運賃は陸の運賃に比して遙に安い、大平洋航路では雜貨運賃一噸一哩四厘三毛にしかつかぬが（大正九年十一月の計算）我が鐵道運賃は一級品貨切扱の最低率に於いて一噸一哩八厘六毛はかゝる。して定期傭船にすれば運賃積の五分の一ですむ。

かく水が人類交通を容易ならしむることを、争ひ難き事實とするならば、文化の發達が交通の範圍に左右されることに着眼して、或時代に於ける人類が主として利用する水の形態によつて、文化史を各々特色ある時代に分たうとすることは、必ずしも無意義の企ではあるまい。勿論此の企は人

類が水面航行に用ふる手段、即ち船舶の形狀動力等の立場からも、或る見界を形造り得るが、同時に航行される水面の形態からも、私どもの思想を或る形式に組立て得ねばならぬ。今假に其の水面の形態によつて文化史を論ぜんか、河川の文化、内海の文化、大洋の文化として、それ／＼特色ある文化の階段を経て、人類は發達し來たと考へ得る。そして「經濟は文化の一断面」[ein Teilausschnitt der Kultur] なりとすれば、此の分類は同時に經濟發達の階程を示すものとして多少の意義があらねばならぬ。

四

千早振る神代の昔から曾て斧斤を知らぬ、鬱蔥たる森林で掩はれた山岳や平野を旅する者の、誰でもが經驗せねばならぬやうに、さうした地方の路の多くは川を辿つて進み、そして其の谷が盡きて漸く一溪を見出し得たとすれば、それは降雨期には小川となるべき森の間隙で、人々はそこに心もとなき歩みを小岩傳へに運ばねばならぬであらう。

河川はその上に船を浮べることによつて、人類に交通の便宜を供するばかりではなく、それ自身道路たる效用をも發揮する、だから人類が山禽野獸魚鼈を捕へて生活した狩獵時代には、川は彼等に好箇の道路と漁場とを提供したであらう。のみならず水が人類にも家畜にも無くてならぬ物たる

關係から、人類が狩獵時代から一步を進めて牧畜を營むに至つても、水草を追ふて轉ずると云ふが如く、彼等は或は河水を探ね求めてたゆりなき地上をそこはかたく彷徨うたでもあらう。然かし遊牧の民は家畜を多く飼養すればする程、廣い平地を要する理由から、河川か造り出す濕潤な、そして少しも手を入れぬならば満水期には沼となるでもあらう平原に長く立ち止る譯に行かず、自然彼等は乾燥した草原へ去らねばならぬ破目となる。だから、かうした點から觀れば、河川は人類がまだ極めて原始的で狩獵や牧畜を以て生業とする頃は餘り多くの貢獻を爲したものは云へず、言を換へれば狩獵時代や牧畜時代には河川經濟の特色として數ふべきものがまだ現はれぬ。

「子、川の上りに在つて曰く、逝く者は斯くの如きか、晝夜を捨てず」と、けに逝く水の流れと人の一生とは、動き動いてす時も止まらぬ。然るに此の不斷流轉の本體たる河川は、或は東に或は西に、放浪する事を樂しむ人類を不可思議な紐を以て一地に縛り付けて了ふ。放蕩息子が程よい妻を持たされた如く、人類は河川を得て放浪から定住の域に進む。即ち河が其の水源地から根氣よく河口へ持ち運ぶ泥土は、謂はゆる豊饒な沖積層を形造つて、人類の生活資料となるべき穀物を繁茂せしめる。此くの如き關係から今迄放浪生活を送つた人類は概ね河口に近い平原に農業を營む事になり、そこ

に一つの社會が出来、社會には分業が起り、生産物の交換が生じ、そして其の交換の範圍が河川の航行の便宜によつて擴張され、河川を中心として生活する一民族間に、大體上農業を組織の核心とする特色ある經濟が成立する。之れを私は今假に名けて河川經濟時代と云はう。實例としてはナイル河畔の古代埃及文化、チグリス、ユーフラテス河畔の古代バビロンの文化等を擧げることが出来る。

私は此れ等の文化の何れにも共通な點を探し出して、河川經濟時代の特色として凡そ次の三を得た。

第一には此くの如き經濟社會は、河川が造り出した沖積層たる豊饒の土地と、河川が供する灌漑用の水の恩恵から生れ出た農業を、經濟組織の中心とすることである。勿論此の時代に於いても、各種の手工業もあり、商業もある殊に十九世紀に至つて數多の史料が発見さるゝに従ひ、古代バビロンの文化は驚く可き發達を遂げてゐた事が明となり、獨逸の或學者は近世資本主義の萌芽は古代バビロンにありとして、可なり詳細な研究を公にしてゐる。然かし、それにしても其の時代の經濟組織の核心をなすもの、換言すれば其の時代の特色の一として數へ得べきものは農業だと云つても誤ではないと思ふ。

第二は其の經濟的交渉の範圍が河川を中心として生活する同一民族間に限られてる事である。固よりエジプトに於いても、バビロンに於いても、他民族との交通が、全然行はれなかつたと云ふのではないが、其れは寧ろ例外的の と云ふは當らぬとすれば比較的顯著でない 現象で、他民族との交通が社會的に意識せられた目的となり、經濟の進歩の方向が一に其れに向つて引きつけられて行く、後に述べる内海經濟時代とは大に趣を異にして主として一民族間に限られてることを指して特色とする。

第三の特色として數ふべきものは、民族間に行はるゝ交通が主として河によつて行はるゝことである、

以上の原理を立證する爲めに、河川に關する無駄話が秩序も無く牛の涎の如く暫くは續くことであらう。

五

埃及の文化はナイル河の賜なりと云はれてゐるが、それでゐるナイル河の源が何處に在るかは久しく知られなかつた。千八百五十八年に英國の Captain Speke 其の他の人々が其の源が湖であるこ

とを發見し、英國女皇の名譽の爲めに Lake Victoria と名づけた。が未だ此の湖水に流れ込む川があるので同氏は更に溯つて千八百六十二年に Ripon Fall に達した。今では其處がナイルの誕生の地とされてゐる。

ナイル河全體の長さは凡そ四千百哩と計算される。然かし實際ナイル河の埃及文化の發達に貢獻した部分は、其のデルタをなす所と河口から六百哩ほど溯つた一の瀧に至るまで狭い河添の平原に過ぎない。

阿非利加が今まから五千年以前から、開明の運に向ひつゝあつた埃及を有するにも拘らず、其の大陸全體の開發が、僅か四世紀前に發見された亞米利加大陸に及ばないのは、ナイル河が前述のやうに航行し得る長さが比較的短いのみならず、阿非利加に於ける他の河川は更に航行に不便である爲めであらう。然るに南北亞米利加に於ける河川は、澤山の水量をもつて海にそゞぎしかも互に交錯して運河のやうな働をする。例へば南米に於いては、ブラタ河の支流からアマゾン河へ、アマゾン河からオリノコ河へ、順次に移つて行くことは容易であるし、北米ではミスツビー河からグレート・レーキへ出て、それから他の河へ容易に移り得る。だから殆ど水路を離るゝこと無しに自由

に大陸内を往來することが出来る。

かく比較して見ればナイル河が埃及文化に貢献した點は阿非利加大陸開發に便宜を供したと云ふ意味でなく、埃及文化それ自身がナイル河の三角洲の上に生れ出た點にある。即ちその經濟的の立場から見れば、ナイル河の毎年の洪水の爲めに、沿岸の土地が新たにされ、肥料を與へられて好個の農耕地たらしめる點にある。

西洋史の教科書が私どもに教へるやうに、ナイル河の洪水は其の下流地方に於いては、六月下旬から二三ヶ月内に洪水が地を掩ひ、九月末には水はもとの河床に歸る。かくして平野は自然の肥料によつて豊饒にされる。

ナイル河の支流は、碧ナイル、白ナイル及びアトバラが重なるものであるが、碧河は其の名の如く澄み、白河は其の名の如く粘土の爲めに白く濁つてゐる。古代埃及人は土地を豊沃にしてくれるのは白河の方と思つてゐたらしいが、實は碧河及アトバラ河はアビニシア山脈から流れ出て、此の二つの支流が運ぶ火山灰が肥料となり、同時に其の泥がテルタを成したものだと云ふ。ナイル河の運ぶ土壌の厚さはテイベスに於ける記念塔の周圍に千七百年間に積つたものが七呎に達することに

よつて、凡そ一世紀間に三吋乃至五吋であると推算されてゐる。

埃及全土の灌溉がナイル河の水量によつて如何なる程度まで行き届くかは、Aswan に於けるナイル河の水量によつて計られる、即ち出水期に於ける其の地の最高水量が二十一呎に過ぎないときは、上部埃及には饑饉が起り、二十五呎から二十六呎六吋に達すれば全國に灌溉され、二十六呎から二十八呎に達するときは洪水となり、其れ以上に水量が増加すれば却て農作物や人畜を害すると云ふ。こんな風にナイルの水量は埃及の農業とは密接の關係があるから、古代からナイル河の水量は精密に計算されたらしく、ナイル河特有の水量計は各地に瀕々と發見され、それは Nilometer と名づけられてゐる。

ロイダ島にある水量計は方十六呎の井戸の中に柱を立て、ある。そして其の柱の上端は横木で壁に支へられ、井戸の底はナイル河に通じ、水量の増減が此の柱にしてある目盛によつて計算する仕掛となつてゐる。柱の目盛は十七に分たれ、其の一つの目盛——二十一吋三分の一に相當す——が更に二十四に小分してある。

埃及人がこんな風にナイル河の水量を精密に計算するのは、怠惰な主婦のやうに家計帳のつけつ

ばなしをするのでは無く、水量計の指度によつて各所に堤防を以て堰き止めた貯水所の水量を増減せんが爲めである。此くの如く各所に貯水所が造られてるのみならず、交通用の運河も多數あるから、堤防運河の建設修理は埃及の主たる經濟行政で、之が爲めには人民に夫役を命じ又多數の奴隸を使用したこともある。

紀元前二千年乃至千八百年頃テーベスに都した第十二王朝時代の或王によつて行はれた、メンフキスの西に當る沙漠のフワユム・オーシスの灌漑は最も有名なもので、其の邊一帶は海面より低く、ナイルの支流が瀝ぐ湖水がある所であるが、驚く可き程巧妙な土木技術を以て洪水期に處する治水の方法を講じて、耕地面積をたいへん廣げたのであつた。

埃及の交通が主として水運に依つたと云ふことは、紀元前千八百年乃至千五百八十年に亞細亞の遊牧民が、埃及を征服して建設したヒクゾス王朝に至るまでは馬が無かつたが、此の時代に始めて亞細亞から馬が輸入されたと云ふ事によつても大概は想像がつく、固より其の以前には駱駝や驢馬はあつたであらうが、それでも埃及の經濟はナイル河によつて基を開かれ、ナイル河の附近に住んだ同一民族の間に、而も主として河川による交通によつて發達して來たものと云ひ得るであらう。

第十八王朝（紀元前一五八〇——一三五〇）のThothmes II の皇后 Hatshepsut が建てた寺が *Dei El-Bahari* にある。其處にある彫刻に、其の頃紅海沿岸のブント遠征に使用した船の圖があるが、それには二本の櫓があり、無數の帆網が張つてあり、可なり大型の船で、ブントの貢物が一杯積まれた景氣の好い處を描いたものだ。當時ブントからの貢物は、香木、香料、黄金、其他珍木異獸であるが、其後同地方との交易も行はれたと云ふ。次いで Thothmes III は埃及のアレキサンダーと云はるゝ程の人であつたが、其の頃の領土はナイル河上流からユーフラテスの中流まで及んだ。彼がシリア征服によつて埃及に持ち來した富は、埃及に於ける美術や工業の發達を大に刺激したと云はれてる、下つて *Negus II* がフキニシアの水夫を使役して阿非利加大陸の廻航を企てたことは、有名な話であるが、此の大遠征が成功したらしい事は、ヘロドタスの記録に、岬を廻つてからは太陽を右手即ち北方に見たと水夫が歸つてから物語つたとあるによつても推測される。

かくして河の埃及人が海に出づるに至つて、恰もナイル河が海に朝するやうに、埃及固有の文化は、世界文化の大潮流に合していつた。埃及の文化は亡びた。

ナイル河畔の埃及文化に次いで、河川經濟時代の恰好の實例となるものは、チグリス、ユーフラテスの下流地方に生れ出でた古代バビロンの文化であらう。そしてバビロンの文化の花も矢張りチグリス、ユーフラテス河が造り出した豊沃な沖積層に培はれて開いたものと云へる。

現今ではチグリス、ユーフラテスの兩河は、波斯灣から七十哩程隔つた *Carnat Ali* で合流するが、太古に於いては波斯灣は殆んど今の合流點あたりまで突入して、チグリス、ユーフラテスは別々に海へ瀧いだらしい。創世紀にある樂園とは、此兩河の下流地方を指したものだらうと云はるゝ程、土地は豊饒で、穀物は云ふまでも無く良くでき、一年に二三度の收穫があつた。だからヘロドタスがバビロンの事を書いて、そこでは播種の二百倍乃至三百倍の收穫があると云つたのも決して誇張の言草ではないとされてゐる。穀物がかく豊かに實つたばかりでなく、「觀るにうるはしく、食ふに善きもろくの樹は」流れのほとりに繁り合つた。透明なすがくしい空氣の中に葉は累々として輝いた。綠色のくつきりとした廣い葉蔭には無花果はつや／＼しく熟した。若しこんな美しい結構な土地であつたとすれば、それが遊牧の民を誘つて、彼等をそこに定住させて了つたことは、決して無理のない事であつたであらう。

然かし其の面積は極めて狭く、長さ五十哩幅十哩に過ぎず、其處を網の眼のやうに運河が掘鑿されてゐた。かく運河を造ることは幸にも埃及に比して遙に容易なる事情があつた。それは兩河の水準に差異があつて、上部地方ではチグリス河がユーフラテス河より高いから、チグリス河の水をユフラテス河へ容易に導き得たし、下流地方は逆にユーフラテス河からチグリス河へ容易に導き得たからだ。そして此の運河に添ふて城壁で囲まれた小さい町々が建てられてゐた。だから町から町への交通は、此の運河によつて行はれ、別に灌漑用の運河もあつた。此くの如く運河が農業の爲めにも又交通の爲めにも無くてならぬもので有つた爲め、運河の建設改良維持は最も大切な經濟行政であつた。そして運河の維持は町々が擔當したらしく、其の費用の一部分は、運河税によつて支辨されたものと見える紀元前二千年に成つたハンムラビの法典には町々の運河税に關する規定があると云ふ。

古代バビロンの町々は運河によつて互に交通されたのみならず、各々の町は亦船舶交通の必然の要求に應じて、特種の施設をした。例へば紀元前二千三百四十年頃のグデアスの時代に町々に港の

施設があつた事が、発見されてゐる。

こんな風に船舶による交通が重要義を持つた爲め、ハンムラビの法典では船大工に重要な社會的地位を與へて普通の大工の棟梁や家畜貸付業者よりは、船大工を上位に置いてあつた。

當時の造船術に就いては、詳しく知られてないが、ハンムラビの法典によれば船舶の平均積載は六十グルダとあり、六十グルは六千四百キログラムに當ると云ふから、そんなに大型のものではない。こんな小船の交通が利益であつたことは、陸上に於ける駱駝の使用に比較すれば直ぐ解る。若し六千四百キログラムを駱駝で運ぶとすれば二十四乃至四十四の駱駝を要し、假に馬子——と云ふも可笑しいが——と同數の船頭が必要であるとしても、船は物を食はぬ、のみならず船一艘は當時に於いて駱駝一頭よりも安かつたと云ふから水運が經濟的であつた事が推測される。

當時の水運は必ずしも、町から町への運河の交通のみには限られてゐなかつた。ユーフラテス河を北へ溯江して上流地方に住む文化の低い民族と交易が行はれ、そこから奴隸が輸入された、又波斯灣上に船を浮べて、其の沿岸地方から各種の石材を輸入した、のみならず海上遙に印度との交通も行はれたと云ふ。

西方の諸國とは、シリア、アラビヤの沙漠を経て、駱駝と驢馬によつて交通された。此の際商の交通は、餘程昔から行はれたらしく埃及の第六王朝とサルゴンとの間に外交上の使節の交換があり、商業上の交通が行はれた史實がある。

バビロンの文化は普通に私共が考へてゐるよりは、遙に進歩してゐて、農業のみならず、毛織、皮革、陶器、象牙細工、鑄型、金屬加工等の諸工業も發達し、従つて商業も盛であつて、銀行の萌芽も此の時代に發すると云ふから、此の時代を指して、或る獨逸の經濟學者が意味したやうな意味で農業經濟時代であつたと云ふのは、決して穩當ではないであらう。然かしバビロンの發達した經濟社會は、要するにデギリス、ニューフラテス兩河畔に生じた農業を基として出來上つたことは否む事が出來ず。フキニシアやギリシヤの經濟社會とは大に異なつてゐる。それは後に内海經濟時代を物語ることによつて明となるであらう。

經濟の範圍も無論嚴密には、同一民族間に限られて居なかつた事も前述の如くであるにしても、當時に於ける外國との交通は決して顯著な有力のものではなく、矢つ張り交通の範圍が大體一民族に限られるたと云ふても失當ではあるまい。

エジプト・バビロンの河川經濟時代から、世界經濟史は、ギリシャ・ローマの内海經濟時代へと推し移つていつた。即ち次に來るものは地中海が經濟の中心となつた時代である。

地中海經濟時代の大行列は、フェニシアを先驅とし、ギリシアを前衛とし、ローマを本隊として堂々と練り出してきて、其の後にサラセン帝國が後衛として従ふ。此の外、内海經濟としては、バルチック海を經としハンザ同盟の活動が、花々しく織り込まれた時代もある、が其れは世界文化の大潮流から觀れば、寧ろ支流に屬するものとして此處には述べない。

人類が河川を經濟の中心とすることから、進んで海を經濟の中心とする爲めには、換言すれば或時代の主たる交通路が、河から海へ移つて行く爲めには、相當の條件が備はらねばならぬ。

其れに就いて第一に、誰も考へ付くことは、河川や運河を航行する小型の船では、風烈しく浪高き海には浮べない事である。であるから、河川經濟が内海經濟に推移する爲めには、造船術が相應に發達し、航海術も或程度の發達を遂げねばならぬ事は明である。

然かし此の一條件が満足されただけでは、社會經濟の中心は河から海へと變つて行けないものと

見える。何となれば前にも述べたやうに、エジプトと云ひバビロンと云ひ、造船術も航海術も相當に發達して、バビロンの如きは印度まで航路を辿つて交通したと云はれ、エジプト人は——假令フェニシア人を使つたにしても——阿非利加大陸の廻航をさへ企てたけれども、彼等は到頭海上に雄を唱ふる民族とならずに終つた。そうした史實から考へても或民族が海上に乗り出す爲めには、尙ほ他の條件を要することが明となるであらう。

由來人間は土にしがみ付きたがる動物だ。そして一度びしがみ付いた土地を郷土として、そこを終生慕ひ忘れぬのが彼等の本性らしい。傳書鳩の如く彼等はいつも出で來し郷に歸らんとあせる。異郷の遊子は、ともすれば「旅館人無し夜雨の恨、故郷母あり秋風の涙」の感に耐えぬものだ。彼はまた散策の道すがらフト摘み採つた一莖の野花の香からさへ、上簇頃の蠶の如く望郷の涙の中に故郷の風物をそれからそれと聯想の糸として吐き出すものだ。そんな本性を持つてゐる人間が、板子一枚で此の世と地獄を境すると云はるゝ、頼り無き生活を、渺茫たる海上に營みつゝも、はては浪を枕に心地よく華胥の國に遊ぶ程な大膽な、恐を知らぬ習慣を得るに至り、それが民族的に集積し凝結して、海上に雄を唱ふるに及ぶまでは、何等か更に有力な原因が無くてはならぬ筈だ。

土にしがみ付く人間を、海へ驅り出す爲めには、「自然」は飢餓の鞭を彼等の背に揮はねばならぬ。即ち或民族が一度びは定住した土地、それが殊に磽确で其の民族に十分の生活資料を供し得ないか、或は又民族の人口が漸く増加して、假令土地は豊饒であつたにしても、増えまさり行く人口數に比して不足なる生活資料を供給する面積あるに過ぎぬ場合に、始めて其の民族は海に向つて發展して行くものと見える。

然かし人類の經濟的發展の動因を、單に飢餓のみに求むるには、餘りに經濟現象は複雑である。私共は人類發達の根本原因として、人類には唯だ何か無しに發達したい、理由は無いが活動したい、そうした一種不可思議の衝動があることを忘れてはならぬ。故に若し或民族が「自然」の鞭に打ち打たれたとしても、恰も疲れ切つた瘦馬のやうに路上にへたばるやうな素質を有してゐたとすれば、彼等が經濟的發展も、文化的發達も、何一つとして生れ出す事はないであらう。されば或る民族の郷土が海に圍まれてゐて、美しい龍宮の乙姫様が、そこで魅力ある手招きをしてゐても、又彼等の郷土は彼等に十分な生活資料を供し得なかつたにしても、若し彼等が餘りに消極的であつたとなれば、即ち譬ふれば若き夫婦が彼等の飽く無き性慾は之れを満しつゝも、其の當然の結果たる産

兒を不道徳にも制限して、尙ほ且つ住み馴れた郷土にしがみ付き、安逸な文化生活を貪らんとするが如き、自然に征服せられ、自然の惡がしこき奴隸となるを甘んずる意氣地無きともがらならば、其の民族は終には水からも土からも閉め出しを食つてやがては亡びの暗路を歩むに至るであらう、此くの如きは呪はれたる民族であるカインの末裔である。

物質は必然！生命は自由！必然のいや中に自由の楔を力強く打ち込み、そこにより自由なより活力ある世界を創造する。それが生物の進化であり、それが人類の歴史である。私は自然科学に囚はれ過ぎた多くの經濟學者のやうに、經濟の發達を餘りに外界の事情、そのみから立論するを欲せぬが故に民族の創造的衝動を、そが海上發展の最も有力なる一條件として數ふるであらう。

八

古代に於いてフェニシア人が、海上の民族となつたのは、蓋し最も自然の成り行きであつた。海に沿ふ磽确なる彈丸黒子の地は、多くの民を容れ得べくもなかつた。而かも此の狭き平地の背は高きレバノンの山々に遮ぎられて、彼等は地上に領土を廣むる望を抛たねばならなかつた。が然かし彼等の前面には、地中海が碧色に揺れつゝ、横はつた。そこから吹く香味ある海風は如何に彼等の生

命の底の底から、こみ上げて来る已み難き元氣をそののかしたであらう。彼等は白鷗に随つて波に浮ばんことを希つたに相違ない。彼等は鶴に騎つて海を越えたいと憧がれたでもあらう。しかも幸なるかな「レバノンの香柏」は彼等に良き造船材料を給した。彼等は之れを以て大いなる強き船を造ることが出来た。又彼等は近海に産する悪鬼貝 (Murex) を漁つて、それから紫色の染料を得た、それはフキニシアの産物として最も有名なものであつた。

彼等が最初に活動した舞臺はエーヂアン海であつた。彼等はそこの沿岸の住民と物々交換をし、彼等から奴隸を求め又は略奪した。海からは貝を漁り、島からは黄金を掘り出した。エーヂアン海中の或島の一つの山の如きは、彼等が鑛石を探した爲めに全然山形を失つた程、掘つくり返されたと云ふ。

紀元前十世紀乃至九世紀に至つて希臘の都市國家が、漸く海上に發展するに至り、こゝに兩海權國の衝突が起つた。フキニシア人は終にエーヂアン海から驅逐された。彼等はそこで始めて西方地中海へ乗り出していつたそして此の冒險的航海の主たる目的は錫を得んが爲めであつて、彼等はかくして錫を今の西班牙に得たが、後には此の大膽不敵なるフキニシアの水夫達は、チブラルタル海

峽を越え、大西洋の荒浪を物の數ともせず、西班牙の北西部、英國南西部コーンウォール邊から錫を持ち返つたと云はれてゐる。

此くの如く彼等は古代に於いて、既に地中海を股にかけて横行したのみならず又其の沿岸至る所に植民地を建設した。サイプラスにもロードにも、シシーリーにも、サルチニアにも、北アフリカの沿岸にも植民した。殊に北アフリカのウチカ、ヒツボー、カルセージなどは有名であるが、カルセーチは後にハンニバルを出し、大にローマを苦めた事に於いて誰も知つてゐる。西班牙のカーチズも元を直せばガテスと云ふフキニシアの植民地である。

此くの如く地勢と元氣とは、フキニシア人を海上民族たらしめた。彼等の船舶は増加人口を異境に運んで植民地を建設した。そして多く海濱に位した植民市からはそれ／＼奥地に向ふ陸路が出来たり、又は河川によつて更に交易の範圍が廣められた。フキニシア人が主として商業を營み、異民族と交通した事は注目せねばならぬ特色である。

九

古代に於ける燦然たる希臘の文化は、其の頃まだ未開の漆黒を以て塗りつぶされてゐた歐洲大陸

をてうど黄金色の縁飾のやうに縁取つてゐた、半島の北方に連つてゐるカンパニアン山脈は、寒い北風を鎖す屏風としても蠻人の來襲を防ぐ城壁としても、當時の希臘人にとっては最も頼もしい守護者であつた。北の山脈から半島へ向つて派出する山々は、半島の人々を彼處此處に散在させて、散在させた各々の集團に小さき都市國家を造らせた。かくして祖國の熱愛と自由の憧憬は自づと希臘人の心を燃やした。

また逆巻く海の白き水泡みづわ、そこに戀の女神アフロダイトが住む、そう美しい想像力に富んだ彼等が信じた程、海は彼等の冒險心と商的企業心をそゝつた。然かも希臘半島には多くの入江があり、海岸線の屈曲が多いため、テッサリー、エピラス以南、いづこの地點でも海へは四十哩を出でないされば海を慕ふ心は希臘の民に普く行き渡り、彼等は悉くホーマーの歌つたやうに、「濡れた路」を歩まうと希つた。

紀元前七世紀の初めまでは、希臘の經濟は未だ農業本位であつたと云へる。然かし其の頃でも工業は可なりの程度に發達してゐたが、其れ等の製品は未だほんの地方的需要を充すに過ぎなかつた。だから當時の希臘の市場は、亞細亞の工藝品によつて支配され、海上貿易は尙ほ大體フキニシア人

の手中にあつた。

然るに七世紀に入るに至つて希臘の經濟組織に一大變革を起した。其の變革の有力の原因は人口増加であつた。そして人口増加は云ふ迄も無く、土地の狹隘を結果した。其の頃もう土地と云ふ土地はすつかり開墾され、耕地は極めて細分され且つ周約的に耕されたけれども、それでも土地の收穫が農民だけをさへ養ふに足らなかつたし、耕作が發達するに従つて牧畜は段々に衰退して、人民の多くは唯御祭の時に肉を口にし得るに過ぎなかつた。こんな次第だから既にソロンの時代にオリブ油を除き、其他の食料品の外國輸出を禁ずるに至つた。が其れは實際行はれもしなかつたし、又行はれたとしても食料は不足したらうと云はるゝ。かくして凶作の年毎に小地主は富豪から借金し次の凶年には其の所有地を失ひ、終には借金のかたに大地主の奴隸となつた。こんな食料の不足から自然に希臘人の中に、近海漁業を志すものが生じ、漁業はやがて彼等を海上の商業に導いていつた。即ち彼等は漁業のみに満足せず、フキニシア人に學んで外國貿易を營み、それに依つて生活資料を得やうと努むるやうになり、そして貿易が手廣く營まれるに従つて植民地もでき、本國の過剩人口はそこへ流れていつた。そして植民地ができて更にそこと本國との貿易が旺んになるから、

希臘の外國貿易は一層進歩していつた、そして植民地に定住した多數の者は、奴隸の運命から逃れた小農民であつた。即ち紀元前七世紀頃から植民地の發達と共に、農業國の希臘は商工國に推移したのであるが、希臘の貴族が商業の發達に貢献した點を私共は見逃してはならぬ。

希臘の貴族の多くは當初海賊を營業としたが、希臘人が旺んに海上に發展するに及び海上の秩序維持が自國民の爲めに必要となるに及んでは、海賊の職業も漸く不安を覺ゆるやうになつた。彼等の或者は海賊をして得た財寶を土地に換へて、大地主と成りすました、が此の種の貴族は却て社會の進歩を害したけれども、彼等の或者は大地主となると共に、商業を營んだ。そして彼等は相當の巨資を擁してゐたから、商業上の危險負擔にも耐えることが出來たし、一方自己の所有地からの産物を賣る便宜もあつたりして、益々大きくなり、彼等社會から多くの大商人が出來上つた。彼等はかくして商業の發達に貢献した。

希臘植民地の發達を促した經濟上の原因は、大體以上の如くであつたが、他に政治上の原因もあつた。

紀元前八世紀の終から七世紀の初めにかけて、希臘の各都市國家内には、少數貴族の政治、謂はゆ

る寡頭政治時代が現出し、爲めに黨争が惡辣となり激甚となり、自然失意の黨人は、植民地へ赴いて反對黨の迫害を逃れた。また當時スパルタが漸く勢を得てペロポネサスに於ける他の都市を侵略したことも有力の原因であらう。

のみならず其の頃地中海上の競争者たるフキニシアは、數次アツシリアから手酷い打撃を受けて、彼等の海上の活動は思はしく行かなかつた。希臘は其の隙につけ込んで發展した。のみならず地中海沿岸の大部分は、當時まだ開明人種によつて占領されずゐた事は、彼等の植民を容易ならしめた。

希臘の植民地は大概アポロ神の神託によつて相せられた。新植民地に設けられた祭壇に始めて焼かるゝ聖火は、必ず母都市の祭壇に焼かるゝ聖火の燃えさしを敬虔に持ち運ぶことによつて點火された。そして新舊二都市の市民は、遠く別れても尙ほ同じ神の氏子なりとして意識せられた。然かし希臘植民地と母國との關係は、そんなに密接なものではなく、植民地は決して母國の政治的支配を受くる。肯んじなかつた、かくの如き希臘人の植民は、羅馬の如うに一大帝國を造らなかつたが、怡も鳥類が植物の種子を遠くまで持運ぶやうに、黒海から地中海濱到る處に希臘文化を植ゑつけ、

従つて本國と植民地間の貿易は活潑に行はれた。

希臘本國と植民地間の貿易は、恰も近世に於いて見る如く、大體上原料品は植民地から、製造品は本國から輸出交易された。

もう希臘本國が相當な文化の程度に發達してゐたとすれば、未開地に移住した希臘人が、本國の風俗習慣に執着することは、云ふ迄もあるまい、従つて希臘特有の物品を植民地が本國に對して需めることは、自然の勢と云はねばならぬ。日本人が米國に移住して、既に其處に高い文化が發達してゐるにも拘らず、矢張り赫夜姫が月の世界を慕ふやうに味噌や醤油を戀しがり、年々それを本國から多額に輸入する、まして希臘人が建設した都市の直ぐ外は、未開人が住んでる場合は何かと本國から輸入せねばならなかつたであらう。

第一に彼等が本國から需めたものはオリブ油であつた。

元來橄欖樹は小亞細亞地方の植物で、希臘へも其處から移植されたと云ふが、橄欖はホーマー時代からあつて、希臘の有力の産物となつてゐた。然かし植民地に此の樹を移植しても、短時日間は却々育たぬ。従つてオリブ油は主として本國から輸入せられた。紀元前七世紀頃から希臘のオ

リーブ油の輸出は随分巨額に上つた。

オリブ油は陶器の甕に容れて輸送された關係から、希臘には陶器製造が大量生産として發達し此の粗造陶器から分化してか、又は併行してか、精巧なる陶器も製作され輸出された。希臘のケラミツクと稱する美術的陶器の有名な事は、今に普く知られてゐる。

然かし陶器は油の壺や美術品に限らず、食器の如き日用品として多量に製造せられた。それは當時埃及の硝子器があつたけれども、高價であつた爲め、世間の需要が希臘の陶器に向つていつた爲めであつた。

紀元前四五世紀頃の希臘陶器で、黒海地方に發見されたものと、南伊太利に發見されたものを比較すると、黒海地方のは下等品が多く、南伊太利のは上等品が多いと云ふ。それは黒海地方は未だ文化が低く、上等品を需要するに至らなかつたし、南伊太利地方の得意は、重に希臘人だから文化が進歩し、時々變つたものを需要したのと、當時既に植民地のシラクエースでは、陶器製造が起つて本國と競争した爲めだと學者は語る。市場の趣好を察して製造品の作り方を變へることによつて戦前獨逸の陶器は着々日本品を驅逐した事實を思ひ合せて、希臘の海外貿易が驚く可き發達を遂げ

てゐることが察せられるではないか。

毛織物産地としてはシレットが有名で、始めはフキニシア人から染料を輸入したが、後には彼等自身海中から採集した。後毛綿物の中心地は漸くメガラに移つた。織物は植民地、外國へ輸出せられた。

刀剣、楯、甲冑等を造る金屬工業、皮革業等も旺盛であつた。

植民地が開け、海運が盛となり、輸出貿易市場が廣くなるに従ひ、工業の生産方法は自然大仕掛になつて來たが、等しく大仕掛でも近世の工業は機械の使用によつて其の目的を達し、希臘時代に於いては、奴隸の使用によつて其の目的を達した。そして多數の奴隸は主として黒海沿岸から輸入せられた。即ち同地方は近世の米國に對する阿非利加の如き奴隸供給地であつた。のみならず同地方は希臘の穀倉であつた、そこから希臘へ食料が供給された。

紀元前四百年一ケ年間に於ける、アゼンの海港たるピアレスの關稅收入は三十ターレントであつたが、當時の關稅は輸出入品價の二%を徴したと云ふから、アゼン一年間の輸出入品價は千五百ターレントとなる。然かし荷揚費商人の利益などを算入すれば二千ターレントには達したらうと學者

は云ひ、二千ターレントは邦貨に換算して約三百萬圓に相當する、之れを當時の勞銀から考へるとターレントの購買力は今日の五倍以上に及ぶから、先づ千五百萬圓の輸出入品價とする。當時の雅典の人口は十五萬人あつたと云ふから、輸出入品價一人當りは百圓となる。大正八年の日本の輸出入額を四十億圓として人口を六千萬人としても、漸く一人當り七十圓になるかならずである、此の一事を以て當時の外國貿易が如何に旺なりしかが想像されやう。

雅典の貿易品別に就いては、史實が缺け十分に解らぬ。或る獨逸の學者が、諸般の事實を綜合して丹念に研究した所によれば、輸入品の主たるものは食料品とし、輸入金額の半を占め、其他は皮革工業の原料たる獸皮、出版物の原料たる埃及産ペピラス、金屬加工業の原料たる銅鐵、織物工業の原料たる羊毛亞麻、造船材料として材木等で、香料、香油、象牙、貴金屬、寶石などは比較的少額なりしならんとある。

右の輸入品に對する輸出品は、陶器、皮革、織物、金屬加工品、オリーブ油であつた。

希臘の植民地が發達し、海外貿易が旺になり、従つて大量生産が發達したことは、凡そ上述の如くであるが、かく希臘をして、農業國より商工國への推移を可能ならしめたのは、其の國が地中

海に臨んで、地中海を主たる交通路として利用し得た爲めだと、私は言ひたい、何となれば、

第一に地中海があつた爲めに、其處を船で貨物を運ぶことは、陸上を駱駝や驢馬や馬によつて運搬するよりは、遙に運賃を軽減することが出来た。

第二に海上運送は陸上運送に比して、容積の大きいものを容易に運び得る。言ひ換へれば海運に於いては貨物の容積重量が、貨物の賣れ行く廣さ (Kreis der Waren) と陸運の如く制限しない、そして同じ水運でも貨物の市場範圍は、河川運送よりは海上運送が廣い。

以上の二條件が満足された爲め、希臘の生産物も外國の生産物も、海運の便宜によつて市場を擴張することが出来た。此くの如き事情があつたればこそ、黒海地方の穀物が大量運送の方法によつて希臘の各都市に輸入され得たのである。しかも之れが爲めに、希臘人は自國産の穀物よりは輸入穀物を安價に購求し得た、そして同時に原料品を輸入するに便宜の地を選び、其處で優良な職工さへ得らるゝならば、各種の工業を起し、其製品を海外に輸出することによつて、生活し得た筈である。即ち地中海は産業を原料産地から獨立せしめた。エマソンは英國は良い國、棉も産せずには棉織物が出来、果物は産せずとも常に世界の美果を味ひ得る、そんな風な事を書いてゐるが、希臘は三

千年も昔に恰も近代の英國の如き地位を占めてゐて、希臘人は自國の自然が産出せざる多くの貨物を消費し得たのであつた。かく視すれば蒸汽機關の發明、航海術の發達などによつて西北歐洲が十九世紀に至つて漸く到達し得た域に、希臘は自然の位置——地理的關係から、規模は小さいながらも、遠くの昔に達してゐたのであつた。此の意味に於いて希臘の經濟史を研究することは、隱居の形造りと同視さるべきでなく、經世の學として何等かの意義がなくてはならぬ。

+

希臘に次いで歴史の舞臺に現はれ、地中海經濟時代の頂點を形造つたのは羅馬であつた。羅馬の最盛期に於ける領土は實に廣かつた。東はユーフラテス河畔より西は大西洋に達し、南はリビヤ沙漠から北はチビオート山に及んだ。其の面積は十萬方哩、人口は九千萬人を有したと云はれてゐる。偉大なる此の征服者は東には希臘の文化を同化し、西北にはケルト、ゲルマンを羅馬化し、營業、居住移轉の自由を、此の廣き領土の何處にも確立した。即ち羅馬人は全領土に於ける人民の生活を相通じ相化し、羅馬を組織の核心として、そこに一個の有機的經濟社會を造り上げた。

彼等は海に於いては強い海軍力によつて海賊を掃蕩し、陸に於いては精銳なる軍隊を、完全な軍

用道路を開通せしめることによつて、迅速に派遣し、避遠の地尙ほ且つ一個半個の草賊をさへ跋扈せしめなかつた。「凡ての道は羅馬に向つた」、未だ曾て見ざる、平和は世界を支配した、羅馬の平和 Pax Romana それは羅馬人の誇であつた。

そんなに広い領土が一個有機的經濟圈に入つたことは固より羅馬人が強い武力と優れた政治的天才によつて、巧に人種を異にし、文化を異にした多數の人民を統治し得た爲めなるは言ふを俟たぬ然かし地中海が全領土の中心に位し、經濟上重要な地位を占めた地域が、悉く地中海に添うてゐるか、又は埃及の如く其れにナイル河を以て連絡するか、又は黒海地方の如くヘレスポンドを通じて連つてゐるかした事も、其の有力なる原因とせねばならぬ。

實に地中海は羅馬の湖水となつたのであつた。その海運は國家の營む所となつた、そして當時の海運は獨り地中海のみならず、大西洋まで延びて行き、紅海、ペルシヤ灣印度洋にも羅馬の船は浮かんだ。大商船隊は埃及から伊太利へ多量の穀物を供給した。また北海、阿弗利加の東岸、印度洋等には羅馬の定期航海船があり、印度進んでは支那とさへ貿易が行はれた。當時の商船の大きさと速力などは近世の蒸汽船に比して必ずしも遜色がなかつたと云はれる。

羅馬の經濟は其の廣さと高さに於いて、未だ曾て見ざる程度に達した。然かし其の質に於いては必ずしも羅馬固有のものでは無つた。産業の技術も形式も希臘のと東洋のとを混化して受け嗣いだと見るべきであらう、が羅馬時代に至つては、希臘時代よりもより一層企業の規模が大きくなり、それが希臘の加く奴隸によつて行はれた事は、注目すべき現象であつた。かく羅馬時代に大企業が發達したのは、貨物の市場が廣くなつた爲めなるは云ふ迄も無いが、他方には、政治的原因によつて、中産階級を亡したことも有力の理由であらう。

羅馬の工業は、羅馬人が植民地屬領で、資本主として經營したのは別として、伊太利本土に於けるものは、ほんの地方的需要を滿すに過ぎなかつた。當時の工業地としてはシリア、エジプトが優位を占めてゐた。が北方地方にもほのかに工業經濟の曙光が見えそめた。リオンの絹織業、ライン地方の硝子工業、ゴール北海岸の毛織業、それ等が漸く擡頭して來た。經濟の中心が地中海から大西洋へ流れ出す潮の響、それは早く既に帝政時代に微かに聽き得たのであつた。

十一

大きい美しい羅馬帝國も終には亡びた。シーザル宮殿の壯觀も、コロシアムの偉觀も、磊然とし

て地に委し石と石の重らざるに至つてしまつた。何故に羅馬は亡びたか？實に羅馬の滅亡は、思想史の上からも、政治史の上からも、乃至は法制史の上からも、興味ある問題として學者の好んで取扱ふ所である。好んで取扱はるゝ困難な問題である。經濟史から見てもそれは同じ様に面白く、同じ様にむづかしい問題であらう。が殊に十五世紀以降世界に覇を唱へた歐羅巴は、大戰後と雖も尙其のシュプリマシーを依然として繼げ行くであらうか、そんな疑が折々私共に、電光の如く閃らめくとき、羅馬滅亡の經濟的原因の探究は、私共の此の疑に意味深き示唆を與へるであらう。

羅馬滅亡の原因に就いては、色々の意見があり、古代史の大家でさへ、其の原因を悉く上げることとは、とても出来ないとさへ云つてゐる。が取り分け大戰後の世界に住む私共の耳に力強く響く説は、羅馬が戰爭嗜殺等によつて、優良な人物を失つた事を滅亡の主因とする説である。

斯説は今日に於いては餘り尊重されてゐないそうであるが。近頃日本ではやつてゐる英吉利の哲學者も、人口問題を論じてゐる所に、斯説を多少の疑を以て首肯してゐる。一國に人物が失はれることは、學校に於いても、家庭に於いても、其他凡ゆる社會生活に於いても、活氣が段々衰へて來て、社會が漸く衰運に向つて行く原因となるであらうことは、何人も容易に想像しうる。が如何なる羅

馬人が優良の人物であつたか、帝國大學の舊制度のやうに銀時計や點數と云ふ輕便の尺度があればよいが、それも行かず、況してそれがどの位殺されたかを歴史的に證明することは、甚だむづかしからうし、更に其れが如何なる程度の影響を及ぼしたか、はつきり見定める譯に行かぬとすれば、斯説を間違なしと受取ることは、誰しも躊躇するであらう。にしても此の度の大戦は歐洲各國の銀時計連を卸賣的に屠殺しなかつたらうか、戦死者は七百萬人あつたと云ふではないか、歐洲は今迄造り上げて來た華やかな文化と共に、其の裏面に犯して來た眞黒な恐ろしい罪の贖として、此の大戦を通じて神の祭壇に若き小羊の如き青年を數多捧げなかつたであらうか。

更に説を爲す者がある。それは生物が生活力を消耗し盡した後に死んで行くやうに、羅馬は生活力を消耗して亡びたと云ふに在る。

社會は有機體であるにしても、字通りに生物の如く有機體で、生物界の原理を何等の變更なしに社會に適用することは出来まい、のみならず若し此の説が眞實なりとしても餘り多くの教訓的價値がない。然かしバビロンも、埃及も希臘も、羅馬も滅びた、それらの後繼者に文化の遺産を置いて死んで了つた。花は咲き花は散る、歐洲の文化の花のみいつまで其の枯れて行く枝頭に咲きつゝ

けるであらうか。

こんな風に色々の説もあるが、一々此處に列挙することはやめて、經濟に關係ある説に進む。羅馬は印度との貿易に於いて、印度から貨物を輸入したが、之れに對して輸出すべき貨物を生産し得なかつた爲め輸入品の全部を金や銀で拂ひ、それが爲めに羅馬には貨幣が缺乏し、經濟的に麻痺して終に滅亡したと云ふ説がある。

斯説は然かし史實に合はぬとされてゐる。當時の羅馬領でも東部に於いては、相當に貨物を印度へ輸出した。例へば埃及の亞麻布、硝子器、シリア、アラビヤの武器、馬匹の如きはそれであつたのみならず、東羅馬に於いては、相應に金貨が流通してゐて、其の貨幣制度はづつと後のサラセン帝國時代までも續いてゐた。だから印度に正金を奪はれた爲め羅馬の經濟組織が崩壊したとは云ひ得ない。

然かし西羅馬には漸く貨幣の缺乏を來たしたことは事實で、それは東羅馬が西羅馬に比し經濟的に優勝の地位を占めてゐた爲め、正貨は西から東へ流れ、先づ西羅馬が經濟的に滅びて次いで東羅馬に及んだと云ふ説がある。

伊太利本土の農業は大地主制度であつた。其の起源は可なり古い、既に第二ピユニック戦争後に中小農民が滅亡して、それが社會問題となつたことは著明の事件である。しかして其原因は、羅馬の軍隊組織にあつたとされる。由來羅馬の軍隊は農民によつて組織された。だから戦争がある時は又は戦争は無くとも農民が兵士として勤務してゐる間は、農業労働に不足を來した。然るに小農民は奴隸を持たぬから、労働力が不足すれば、耕地は耕さずに抛つて置くより仕方なく、従つて彼等は巨額の借金をした。のみならず第二ピユニック戦争には、敵軍が伊太利に侵入してすつかり耕地を荒して了つた。然るに貴族や富豪は、或はプロコンソルとか或は其他の役人になつて、地方民を自分一己の私益に使ふことが出來た、そして破産した百姓から其の私有地を取上げたのみならず、公有地までも取上げて奴隸を使用して耕作した。然るに穀物の耕作は後に述ぶるやうな理由によつて不引合な所から、自然耕地は牧場と化していつた。

一方に於いて破産した自由農民は、都會へ流れ込んで、失業者の群に入つた。だから帝政時代に伊太利の中部地方の如きは、廣い野原に十軒の農家だけ見えなくなつたと云ふ。

こんな風に羅馬の經濟事情が變化した爲め、經濟社會の構造に變革が起つて來た。變革の第一は

農民の中小産階級の滅亡の爲めに、伊太利本土の工業が従つて滅亡した事である。先にも述べたやうに伊太利の工業は、主として地方的の需要を充す爲めに存在した。然るに其の需要者たる農民の滅亡は、同時に工業の滅亡を結果した。變革の第二は穀物輸入の増加と之れに伴ふ正貨喪失であつた。何となれば多數の農民が失業者の群として都市に流れ込み、そして終に國家に養はれた、然るに伊太利本土の農業が衰へた結果、穀物は正貨と交換に埃及などから輸入せられねばならなかつた。此くの如き悪影響は、獨り伊太利のみに限らなかつた。奴隸による粗放農業を營む、大地主制度は、ゴールにも傳はりカルセージを通じて西部諸國へ傳播していつた。

また奴隸制度は獨り農業に限らず、工業にも入り込んでゐるが、羅馬が東部諸國を征服して、多數の奴隸を容易に得られた時代はよかつたとしても、其の奴隸の供給が段々に減じて來たのに、一方東部諸國の自由労働による發達した産業と不知不識の間に競争する地位に置かれ、それに敗亡して終に羅馬は滅びた。羅馬は奴隸によつて贅澤をし奴隸によつて滅びた。近世の經濟は機械によつて作り上げられた、のみならず自由人を機械の如く取扱つた、見よ二十世紀は如何に機械扱された労働者が、偉大なる破壊力を揮ひつゝあるかを、亡びの路を歩む者よ、今少しく眞剣に考へる、その

思はず叫びたくなる。

當時に於ける東西羅馬の經濟的競争は、現今の如く關稅の牆壁を越えて行はれたものではなかつた。唯兩者を隔つるものは、地中海あるに過ぎなかつた。而かも地中海は交通の便宜を供しこそすれ、兩者の競争には何の障害ともならなかつた。

東羅馬が西羅馬に對して經濟上優勢を占めてゐたことは西羅馬諸國の農業を滅すに有力の加功をした。

何故に東羅馬が西羅馬殊に伊太利の農業を滅す加勢をしたか？それは當時羅馬は國營を以て埃及から穀物を輸入し、之れを市民に配給したから、唯でさへ衰へかゝつてゐた伊太利の農業は、更に手酷い打撃を受けねばならなかつた。元來伊太利は、地味に於いても氣候に於いても、穀物耕作に就いては、とても埃及に及ばない。然るに埃及に於いては、穀物が安價なるが爲め、労働者の生活費は少なくてすむ、そして埃及の労働者は奴隸ではなかつたから、周約的農法によることができたし、生産額も従つて多かつた。然るに伊太利では、地味が劣つてゐるのに、假令奴隸でも高價の食物を供せねばならなかつたのに、生産額は自由労働者よりも少く、一方奴隸の供給が段々減じて、奴

隷それ自身の價格は騰貴した。即ち當時西羅馬の經濟的競争は、自由經濟と奴隷經濟の競争であつた。近世に於いては亞米利加で奴隷を使用した場合は、地味の豊沃な所を、安い奴隷で粗放農法を行つたのであるが、西羅馬に於いては、高い奴隷を、地味の悪い所に使ひ、粗放農法を採つたから當然の結果奴隷經濟は競争に敗れざるを得なかつた。

斯くして伊太利農業の滅亡と共に、そこに工業も亡び、益々東部の工業品が輸入されて、西羅馬は漸次に金銀を失ひ、金銀の減少は貨幣の喪失となつた。然るに硬貨が無くとも交換の媒介、價値の尺度となるものが有ればよかつたらう、當時埃及の如きは、各地に多數の公營倉庫があり、運河の便を利用して、恰も現今の振替貯金の如き穀物振替制度が驚く可き發達を遂げてゐて、硬貨も無論あつたが、穀物が随分都合よく貨幣の代用もした、——其の制度の詳細は他日機を見て説いてもよいが——然るに悲しいかな伊太利には、こんな便宜の方法を設くべき、自然的の條件が缺けてゐた爲め、貨幣の缺乏と共に、經濟は原始時代へ逆轉して、不便極まる物々交換が行はれるやうになり、産業は層一層、萎靡衰退して經濟組織の全建築が崩壊するに至つた。其の弱り目へゲルマン人の來襲がたゞつて、羅馬は息を引取らねばならなかつた。だから羅馬滅亡の經濟的原因は、もう帝

政時代からそろ／＼働き始めてゐたのであつた。若し炯眼な豫言者があつたなら、極盛期の花やかな羅馬貴族が、自らは氣が付かずに、冷かな黒い死の影を伴つてゐたことを洞見し得たであらう。

西羅馬が經濟的に滅亡してからは、東羅馬は其の生産物の市場を失ひ、やがては自らも衰亡の道を歩まねばならなかつた。そこへアラビヤの野からマホメット教徒が現はれて、介添の利刃を振つたかく物語つて、私は讀者に現今の世界の姿をつく／＼と視詰めんことを勧告する。此の物語は必ず何等かの示唆を與へるであらう。

佛蘭西戰跡の慘狀を、私は今思ひ浮べても、襟元から冷水を洒かれるやうに感ずる。しかも其れは三百萬町歩の廣きに及ぶと云ふ、そして内百萬町歩は有機物に乏しい新しい土が、下から堀り上げられて良い土壌が失はれた爲め、舊態に復するには十年を要するだらうとの事である。おまけに人口は戰死やら産兒制限やらで減少し各産業の勞働力の四割は不足してると云ふ。佛境露の農工業も資本が不足して、殆ど麻痺してしまつたし、英國では殊に失業問題が喧しい。又昨年のは七圓フランは十二三錢、馬克は二三錢しかつかず、ループル、クローネに至つては御話にもならぬ。瑞西では塊國の紙幣を輸入してビール瓶のレットルに使つてるとか云ふ。ケルンで英國婦人が小兒を

連れて街頭を散歩した。小兒は道に落ちてゐたマーク紙幣を拾ひ上げた。と母は子に獨逸のマークだ御捨てなさいと言つたと言ふ。獨逸露の貨幣制度は、全然崩壊したと云つてもよい、そして英國では歐洲大陸との貿易を、物々交換によつて試みやうと唱へる人がある。貨幣制度信用制度を亡くして物々交換に復へつて、近世の如き複雑な經濟が、萬遍なく運轉するであらうか、ポルンビストの貨幣を亡す政策は成功するであらうか、私は疑なきを得ぬ、然るに歐洲の金を吸収した米國は、歐洲に比して大企業に適し、工業は益々發達し、從來の如く穀物や棉花のみならず、工業製品をも多量に輸出するに至るであらう。歐洲に輸出せずとも、英國の植民地や南米や支那へは輸出し得るであらう。かくして歐洲はどうなるか、兎に角羅馬は數世紀を費して亡びた。

十二

羅馬の滅亡について、羅馬が建築した地中海經濟の舞臺の上に、近世文明の先驅とも見るべき自然科學と新しい國家思想の繪具もて描かれた書割を背にして、イスラムの帝國が現はれた。アラビヤ人の指導の下に、地中海は再び小亞細亞沿岸、シリア、エジプト、北アフリ加、西班牙、南部佛蘭西、南部伊太利の諸地方に住む人民の湖水となつた。そして再び之等の地方に工業と商業は榮え

た。此の時代の經濟を理解する爲めには、マホメット教が商業を重んじた事を見逃がしてはならぬ。基督教が歐洲を教化し、文明に導いた偉功は、誰も認める、が其の僧侶達が利子を否認したり、商業の利益を不正なりとした爲め、基督教は或意味に於いては經濟の發達を阻害した傾向もあつた。然るに元來アラビヤは砂漠で、土地が不毛だから、其處に多くの産物はない、従つてアラビヤの富は多く商人によつて、駱駝の背上で運ばねばならなかつた。こんな事情だから商人は自然社會上に優位を占めてゐた。アラビヤの物語を讀んでも、如何に商人が彼等の社會に尊重されたかを知ることが出来るし、又そうした土地柄に生れた宗教が商業を重んじた事は、無理もなく、アラビヤの豫言者は同時に商人であつた。そしてマホメット自身さへ商人であつたから、彼の後繼者の統治の下には、地中海上の商業は再び旺んとなつたのみならず、東部亞細亞との交通が殊に發達し、又彼等の商業の遣り方は、歐羅巴人を啓發する人が多かつた。

私は内海經濟時代の説明に餘り多くの頁を費した、で此邊で山鳥の尾のしたり尾の長々しき御談議を切り上げるであらう。唯終に内海經濟時代の特色を要約して見れば、

第一は内海を交通の要路とすること。

第一は經濟組織の中心が農業を去つて商工業に變つていつたこと。
 第二は工業が市場生産となり大企業の發達を見たこと。
 第三は外國貿易即ち異民族の間又は植民地間の貿易が重要となつて來たこと。
 第四は外國貿易即ち異民族の間又は植民地間の貿易が重要となつて來たこと。
 等である。之れを河川時代の特色と比較するならば、自ら其の異なる所を見、經濟の發達に興味
 深き脈絡の存するを會得するであらう。(一九三二)

大正十三年六月十日印
 大正十三年六月十三日發行

邊邊經濟論 第二輯
 定價金貳圓

版 權 所 有

著 者

細 貝 正 邦

發行者兼
印刷者

東京市神田區錦町一丁目十二番地
伊 東 三 郎

發 行 所

東京市神田區
錦町一丁目十二番地

自 彊 館 書 店

電話神田二五三三番
振替東京三一四三七番

500

11

終

